3.11
東日本大震災から５年

公益社団法人
みらいサポート石巻
Ishinomaki Future Support Association

石巻におけるNPOの貢献

集まった「想い」と「経験」が形作ったもの

未曾有の大災害となった、東日本大震災。
最大規模の被災地・石巻には、震災から最初の１年間に累計28万人ものボランティア※が集まりました。

石巻における災害支援活動は、「行政」と「災害ボランティアセンター」、そして「ＮＰＯ・NGO」などのボランティア団体の連携が成功したといわれています。
この報告書では、当団体の活動に留まらず、その連携方法やＮＰＯ・NGOの活動内容についてもご紹介いたします。

あの時、石巻に集まった人たちが、どんな想いで、何を成し遂げたのか・・・。
また、どのような変化のなかで活動を続けてきたのか。そして、今回の経験を今後にどう活かすのか・・・。

発災より５年を迎え、ここ“石巻”から改めて考えたいと思います。

※ボランティア：団体(NPO)、個人の活動を含めて使用しています。

目　　次

1　東日本大震災支援におけるＮＰＯ、ボランティアの貢献 …… 1
　1.1　ＮＰＯ、ボランティアのチカラ
　1.2　震災から1年間の活動人数、活動内容の推移

2　各機関との連携 …… 5
　2.1　石巻市社会福祉協議会との関係
　2.2　石巻市および自衛隊との関係
　2.3　石巻専修大学からのサポート

3　ＮＰＯの連携 …… 9
　3.1　ＮＰＯだから出来たこと
　3.2　連絡調整会議「全体会」
　3.3　分科会
　3.4　“想い×経験”の結晶として〈座談会〉

＜コラム：関係団体からの寄稿＞…… 20

4　活動年表 …… 21

5　登録団体一覧 …… 25

6　東日本大震災から5年間のNPO連携 …… 27
　6.1　緊急期～1年目の物資支援方針の共有
　6.2　1年目のIDRACの反省点
　6.3　2年目以降のNPOの活動人数
　6.4　NPO連絡会の変遷
　6.5　災害時におけるNPOの「登録」から集中復興期間の連携へ
　6.6　6年目を迎えて～私たちの変化～

＜コラム②：石巻市の連絡会開催団体からの寄稿＞…… 31

7　事業報告、決算報告 …… 32
　7.1 事業報告（公益目的事業）
　　1 被災者支援の連携推進
　　2 宮城県における防災教育
　　3 伝承・交流事業
　　4 安全・安心のまちづくり
　　5 地域づくりサポート事業

　7.2 事業報告（収益事業）
　　1 IT事業

　7.3 決算報告
　　1 経常収益
　　2 経常支出

8　巻末資料 …… 39
　石巻市におけるボランティア・NPOの連携に関する資料

9　代表あいさつ …… 46
　編集後記

1. 石巻におけるNPO、ボランティアの貢献

—2011年3月11日14時46分、東日本大震災　発災—

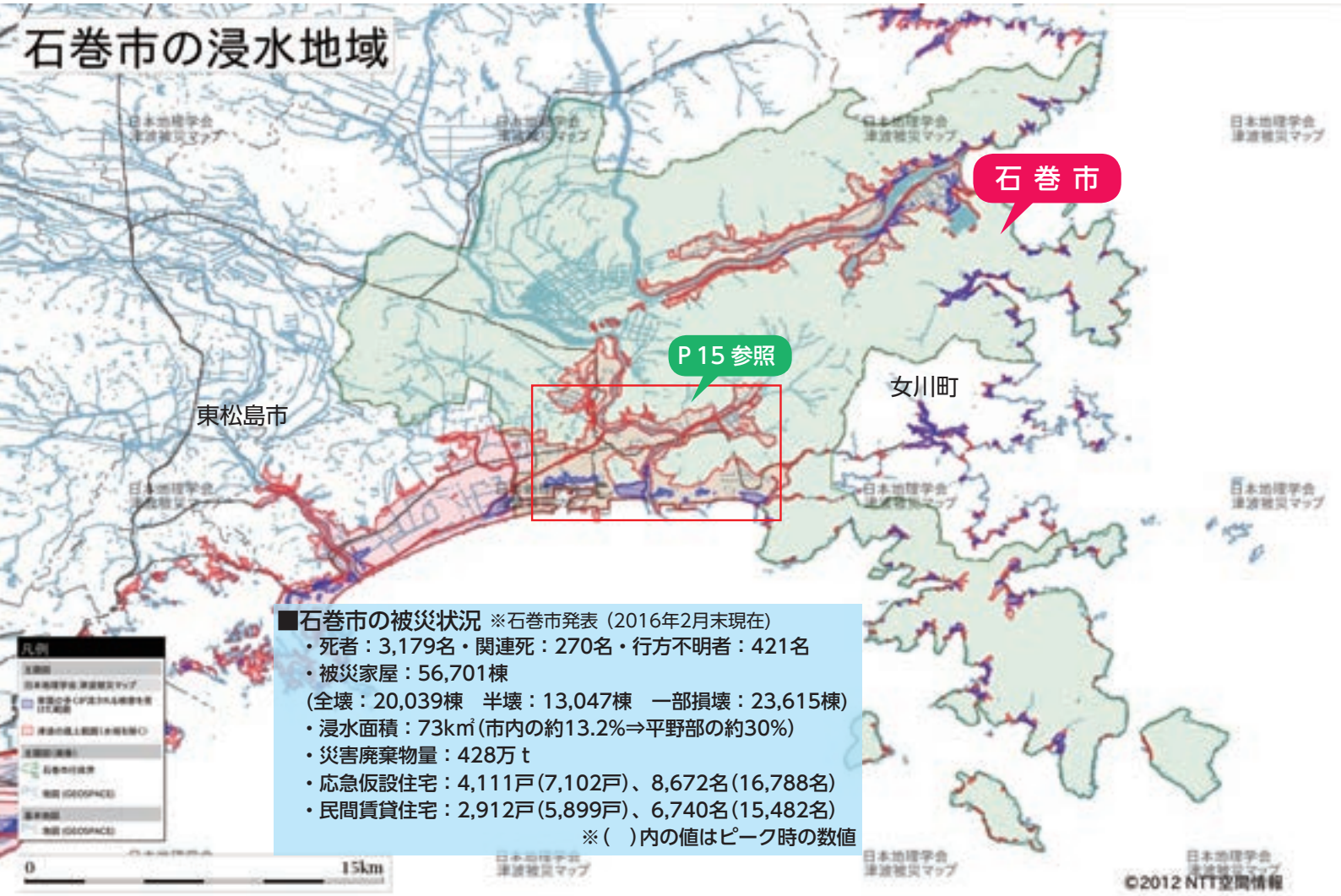
大津波の被害は想像を絶するものとなり、最大規模の被災地となった石巻市の死者(関連死含む)・行方不明者は3,870名(2016年１月 石巻市発表)にもおよびます。

津波によって失われたものの大きさは、語る言葉も見つからないほどで、一人の人間に出来ることは限りなく小さく思えました。

そんな中、全国からの励まし、物資、寄付が集まり、1995年の阪神淡路大震災以降、災害の度に全国から駆け付けたNPOや個人のボランティアも、被災地へ向かいました。

被害の甚大さに茫然と立ちすくむ被災者のもとに必要な物資や温かい食事を直接届け、医療やマッサージなどのサービスを提供し、そして、圧倒的な量の瓦礫やヘドロを黙々と片付けてゆくＮＰＯとボランティア。

災害後の不便で制約の多い環境下にあって滞在場所や食料など全て「自己完結」で被災地に駆け付けたボランティアの存在は、被災者一人ひとりがあの大震災から一歩を踏み出すための力にもなりました。



■石巻市の被災状況 ※石巻市発表（2016年2月末現在）
- 死者：3,179名・関連死：270名・行方不明者：421名
- 被災家屋：56,701棟
(全壊：20,039棟　半壊：13,047棟　一部損壊：23,615棟)
- 浸水面積：73㎢(市内の約13.2%⇒平野部の約30%)
- 災害廃棄物量：428万ｔ
- 応急仮設住宅：4,111戸(7,102戸)、8,672名(16,788名)
- 民間賃貸住宅：2,912戸(5,899戸)、6,740名(15,482名)

※(　)内の値はピーク時の数値

1-1. NPO、ボランティアのチカラ

ＮＰＯ：この報告書におけるＮＰＯという単語は、ＮＰＯ法人はもちろん、一般社団法人や、企業のＣＳＲ活動、法人格を持たない任意団体、有志の集まり、ボランティア団体等を含めた広い意味での「非営利団体」を指す用語として使用しています。

IDRAC：石巻災害復興支援協議会の英語名称
(Ishinoamki Disaster Recovery Assistance Council) の略称です。

震災直後から、災害支援経験豊富なＮＰＯが石巻に徐々に集まり、物資配布、炊出し、泥出しなどの活動が始まりました。
そして、石巻市災害ボランティアセンターの声掛けにより、3月20日に各団体の活動を情報共有するために「ＮＰＯ・ＮＧＯ連絡会」が始まりました。

ＮＰＯ、ボランティアによる連携が目に見える形となったのは、4月10日の街なかスマイルプロジェクト(街なか清掃)。
自宅や店、道路に広がる瓦礫やヘドロに直面していた住民の前で、各地から集まった1,000人近くのボランティアがみるみるうちに瓦礫を片付けてゆく光景は、「連携」が確かな力になることを感じさせてくれました。（上記写真参照）

ＮＰＯやボランティアは基本的に自主的な活動を行うため、その全体像把握は難しくなりますが、石巻では4月2日に発足した「ＮＰＯ・ＮＧＯ連絡会」が「石巻災害復興支援協議会（IDRAC)」へと名称を変え、5月13日に法人化した以降も、多くの方々の協力によって情報共有の場と連携体制を継続することができました。
その貴重なデータを元に、石巻でＮＰＯが果たした成果や役割を次ページから紹介いたします。

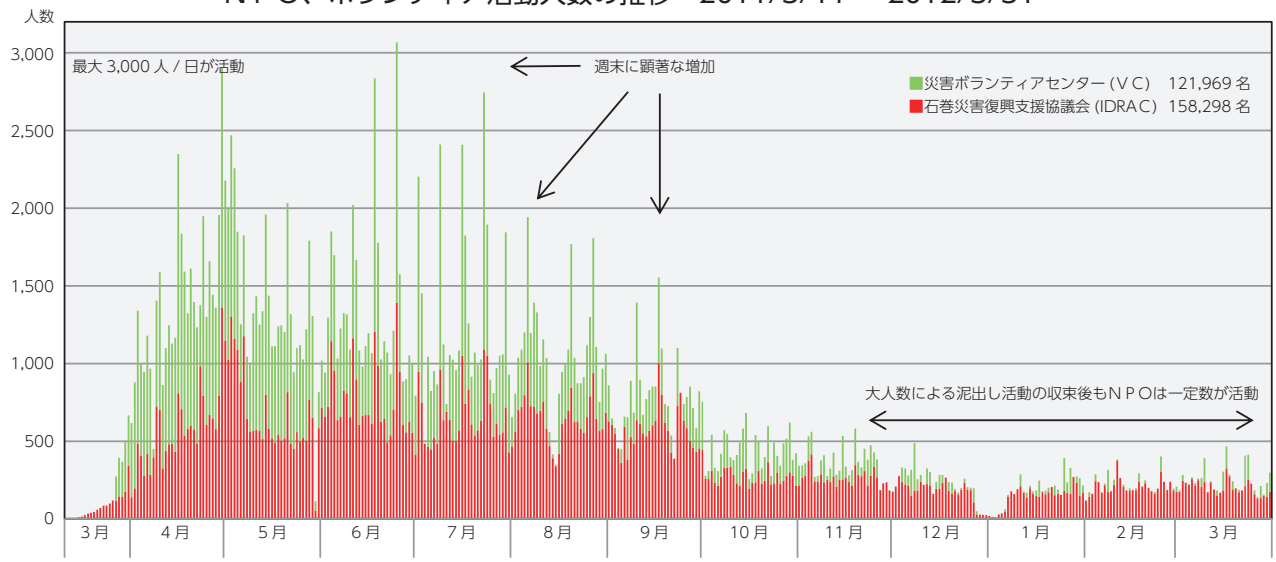
ＮＰＯやボランティアの力が広く社会に認知され、今後の災害救援活動における担い手として位置付けられるように。

1-2. 震災から１年間の活動人数、活動内容の推移

災害ボランティアセンター（以下、ＶＣ）との連携が初期段階から上手く機能したこともあり、ＮＰＯの大規模な活動が可能となった石巻市。

発災から約1年間で、のべ**28万人**（石巻市人口の約1.5倍）を超える方々が、ＶＣによる派遣、もしくはＮＰＯのもとで石巻地域における震災支援活動に取り組みました。

ＮＰＯ、ボランティア活動人数の推移　2011/3/11 ～ 2012/3/31



石巻には毎日百人単位で活動するＮＰＯが複数存在していた上に、ＶＣも積極的なコーディネートを行い、1年間でのべ28万人を超える大規模な受け入れが可能となりました。

週末には平日の数倍に当たる3,000人程が活動する日もありました。沿岸部も含めて地域のニーズを調査したＮＰＯのリーダーが毎日の会議でＶＣと密な調整を行い、週末ボランティアの受け入れに協力することで、毎週末の活動希望者数の変動にも柔軟に対応しました。

また、石巻災害復興支援協議会がＮＰＯの登録制度を持ち、ＮＰＯの活動内容や規模を共有する「全体会」という場が石巻専修大学に設けられ、石巻全域にわたる活動の把握につながりました。

石巻災害復興支援協議会の受入人数算出根拠

1）全体会で報告された各分科会の活動人数を集計し、分科会に該当しない活動を行っている大規模団体からの別途報告を加算したもの。
2）ＮＰＯからの報告・訂正により、全体会議事録や災害対策本部への実績報告とは誤差がある。

注記事項

1）ＩＤＲＡＣに登録していても全体会やメールでの報告のない団体については、カウントしていない。
2）初期にＶＣ経由でＮＰＯへ派遣された場合にＶＣ活動人数　と重複があったが、可能な範囲で修正。
3）特に平成23年3月は人数報告のシステムが確立していなかったため、把握できる範囲でしか集計できていない。
4）ＮＰＯの有給スタッフ分を活動人数に含めて報告するかどうかは団体の判断によっている。

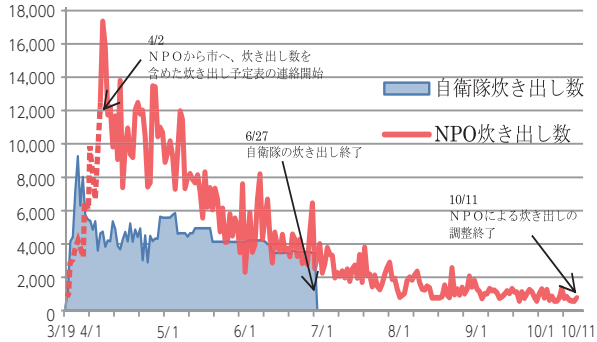
■ 炊き出し数の推移

炊き出し調整役の不足は他被災地域のＶＣでも課題であり、外部団体に調整役を託した市町ＶＣが多くありました。

石巻でも炊き出し調整業務を引き受ける団体の申し出があり、ＶＣによるボランティアのマッチングとは別の担当者により炊き出し調整が開始されました。

自衛隊に匹敵する最大1.7万食/日を超える炊き出しは、行政・自衛隊より信頼を得る一因にもなりました。緊急期を過ぎた避難所においては自立を妨げないよう自主調理を促す配慮も行い、行政と情報交換しながら徐々に数量を減らし、市内の避難所閉鎖（10月11日）をもって調整を終了しました。

行政（自衛隊）とＮＰＯによる炊き出し数の推移



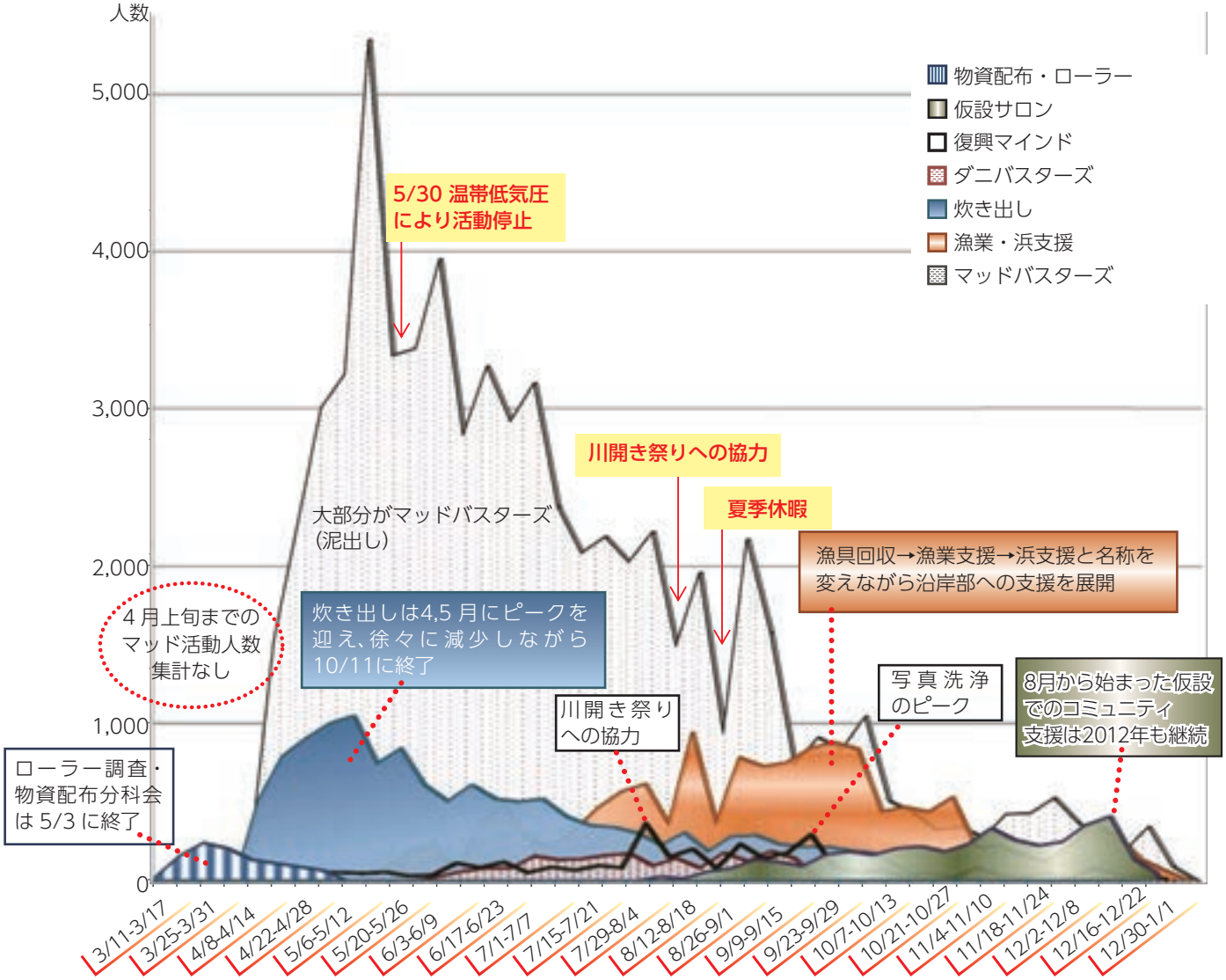
※ＮＰＯによる炊き出し数は、事務局の調整を経て市へ連絡していた炊き出し予定数を元に計上しています。
(４月１日以前は個別聞き取り等により確認できた提供食数のみを点線表記。
　提供内容は汁物･麺類･スナック等バラエティに富んでおり、震災直後に初めて提供された温かい汁物も、困窮期を過ぎた後の盛夏のかき氷も「1 食」と計上。)
※データ提供を快諾下さった市産業部および自衛隊の方々に心より感謝申し上げます。
※引用等をご希望の方は発行元へのお問い合わせをお願いいたします。

■ 各分科会の活動人数推移

「現場のニーズにマッチした支援」「復興のフェーズに合わせた支援」という言葉の通り、長期滞在するＮＰＯのリーダー達が被災した市民と密にコミュニケーションをとり、支援の必要な場所やその内容をみい出し、他団体と共有・連携しながら様々な活動を展開していました。

石巻では多岐にわたる活動が行われ、活動分野ごとに「分科会」（P11,12参照）がもうけられました。その中でも大多数を占めたのが「マッドバスターズ」と呼ばれた泥出し・瓦礫出し・家屋清掃に類する活動でした。ＶＣによるコーディネートで最も大規模に活動が行われ、迅速に泥出しが進んだことから、10月には活動規模が収束し始めました。

1 週間ごとのＮＰＯ活動人数の推移　2011/3/11 ～ 12/31

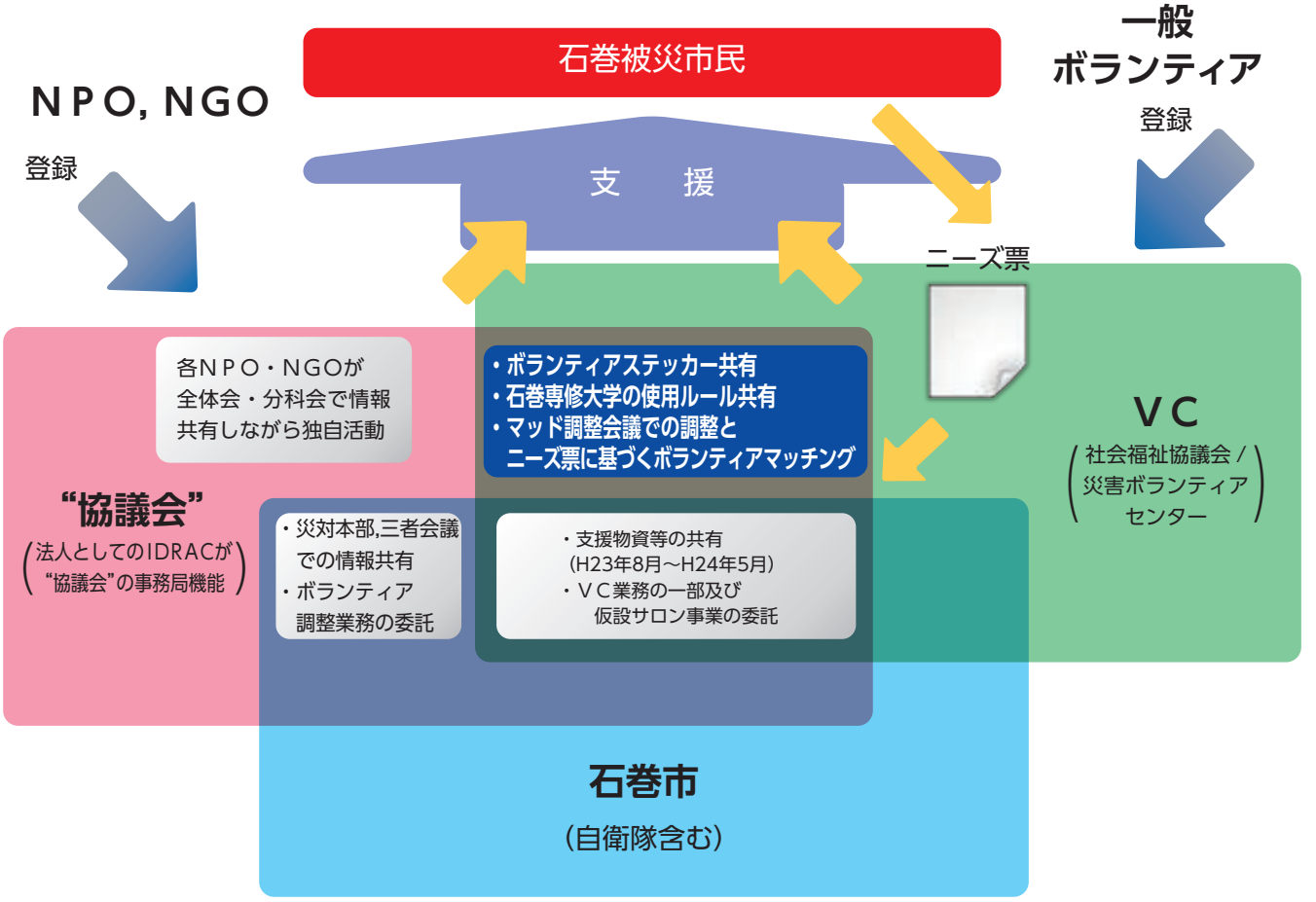


マッドバスターズ以外の分科会活動人数の推移からも、現地ニーズの変化に応じてＮＰＯが活動や規模を柔軟に変えてきたことがわかります。物資配布・ローラー分科会は、行政による在宅コミュニティでの配布開始を受けて５月に終了し、「ダニバスターズ」は、梅雨の時期から避難所が解散するまで活動しました。復興に向けた気持ちを鼓舞する「復興マインド」ではお祭りを支援するなどＮＰＯらしい活動を展開しながら、８月から仮設住宅での支援が開始され、２年目も一定数が活動しました。

※本ページのグラフは、ＮＰＯによる活動内容の大まかな推移を表すものです。
　全体会での報告の他、各団体からの個別報告や、仮設サロン支援連絡会を通じた報告から１週間ごとの活動人数を出来る限り正確さを期して集計し、活動規模の大きな分科会のみをグラフ化しました。
※グラフに表示していない分科会や、私たちの情報共有が及ばない範囲でも、多様な活動が展開されました。
※引用等をご希望の方は発行元へのお問い合わせをお願いいたします。

2. 各機関との連携

2-1. 石巻市社会福祉協議会との関係



マッド調整会議
2011年4月6日撮影

側溝清掃の地域分担(WEBでも公開)
ＮＰＯごとに色分け表示

石巻市における災害ボランティアの受け入れは、石巻市社会福祉協議会が石巻市災害ボランティアセンター（以下、ＶＣ）を設置し、県外ボランティアに向けて一早く門戸を開いたことからスタートしました。

ＶＣは（他地域と同様に）活動内容が明確に決まっていない一般ボランティアに対し、石巻市民からの「ニーズ票」に基づいて活動のマッチングを行いました。
一方で、予め支援内容・目的が明確で実行力を持ったＮＰＯは、ニーズに応じた独自活動を迅速に開始しました。3月20日の「ＮＰＯ・ＮＧＯ連絡会」発足以降、ＮＰＯの情報共有・調整はＶＣと役割分担をして、「ＮＰＯ・ＮＧＯ連絡会」から名前を変えた石巻災害復興支援協議会（左図の“協議会”）で行われるようになりました。

ＶＣが主催するマッド（泥出し）調整会議では、ＮＰＯのリーダーが出席し、最大3,000名/日を受け入れる体制をつくるなど、大規模な連携活動が可能となりました。

災害直後から毎晩行われていた会議（全体会）により、各ＮＰＯのリーダーは、独自活動（ニーズ票によらない活動）を行いながらも、ＶＣとの情報共有を行いました。

法人としての石巻災害復興支援協議会（ＩＤＲＡＣ）は、右のような事務局機能を担い、多岐にわたる業務を石巻市社会福祉協議会と協働して進めました。

また、ＩＤＲＡＣではＮＰＯの登録制度を設けました。ＶＣはその登録団体に対し、石巻市やＶＣなどの公的機関の倉庫に届いた支援物資を被災した市民に配布できるように証明書を発行しました。

ＶＣと連携するＮＰＯが“協議会”という連携枠組みを作れたことで、ＮＰＯが震災支援の重要な担い手と認められ、ＶＣとＮＰＯの間にこれまでに無い規模の多様な協力体制が作られました。

ＩＤＲＡＣの事務局機能

①ＮＰＯと他機関が連携する枠組み作り
②全体会の議事録作成
③ボランティアステッカーの制作（ＶＣと共同使用）
④石巻専修大学の構内案内図やテントサイト使用ルールの作成
⑤支援団体の訪問対応
⑥Web サイト等によるＮＰＯの活動状況発信

2-2. 石巻市および自衛隊との関係

行政との連携開始の経緯

<2011. 3.24>
石巻市災害対策本部会議を日本財団、ピースボート、め組ＪＡＰＡＮの3団体が初めて傍聴し、団体および活動を紹介。

<2011. 3.25>
「ＮＰＯ・ＮＧＯ連絡会」の議長が、災害対策本部に出席。ボランティアの活動内容を聞かれたことをきっかけに、毎回の報告を開始。

<2011. 3.27>
NPOによる翌日の炊き出し予定について、石巻市へのＦＡＸ連絡開始。

<2011.4.2>
在宅被災者の現状を書面で災害対策本部に提出。

<2011.4.4>
石巻市、自衛隊、NPOの担当者が調整を行う三者会議の開始。

災害支援において豊富な経験を持つＮＰＯが石巻市の災害対策本部会議を傍聴したことがきっかけで、“協議会”の事務局を担った地元スタッフも同会議を傍聴することとなりました。（写真２）

毎晩19時から「ＮＰＯ・ＮＧＯ連絡会」（後の「全体会」）で共有された情報をもって20時から始まる災害対策本部会議に参加するうち、ボランティアの活動内容について質問を受けました。その事がきっかけとなり、ＮＰＯによる炊き出し数や活動人数実績、各活動場所について報告をするようになりました。

石巻災害復興支援協議会を通して調整された炊き出し数は、自衛隊の提供数と並ぶほどの規模（※Ｐ６参照）となったことから、自衛隊との情報交換も行われ（写真３）毎週月曜日に市・自衛隊の担当者レベルによる三者協議が開始されました。

行政による在宅コミュニティ（避難所以外）へも物資・弁当配布が開始されたことで、ＮＰＯが行っていた「物資配布・ローラー（※Ｐ14参照）」分科会を5月初めに終了。また、避難所の閉鎖と弁当配布の数量に合わせてＮＰＯの炊き出しも終わるなど、行政との情報共有によりＮＰＯの支援方針について大局的な判断が可能となりました。

市が管理する物資倉庫に届いた支援物資のＮＰＯによる有効活用、市による炊き出し食材の負担（情報共有していた一部の長期継続団体に対してのみ）など、行政とＮＰＯが直接つながる具体的な連携事例も生まれました。

また、ＮＰＯによる側溝清掃の進捗情報についても市と共有。ＷＦＰ（世界食糧計画）から提供された大型テント（写真４）のボランティアによる使用や、自衛隊からＮＰＯへの地図提供など、多面的な連携が形成され、迅速でフェーズに合わせた効率的な支援を行うことが出来ました。

（写真１）大学構内にできたボランティアのテントサイト

2-3. 石巻専修大学からのサポート

石巻におけるＮＰＯ、ボランティアの活動は、浸水地域に近接しながらも津波被災をまぬがれた石巻専修大学の存在抜きには語れません。

石巻専修大学という「目指すべき場所」があったことは、石巻市にボランティアが集まるために不可欠な条件でした。同時に、被災者に負担を極力かけずに車やバスを停め、テントを張り、トイレが設置され、電気があるという環境は、毎日の作業を終えて一息つける「帰る場所」でもありました。（写真１）

構内の4号館は避難所として、また体育館は県や日本赤十字の仮事務所として開放されました。ＶＣのみならず、ＮＰＯにも5号館の教室が提供されました。（写真５）

さらに、野球部屋内練習場を物資倉庫（写真６）として開放するという決断がなされた結果、スムーズな物資支援が可能になりました。大学は、発災から10月までの7ヶ月間学校施設を開放しました。

ＮＰＯ、ボランティアの情報共有がスムーズに進んだのは、大学・石巻市・社会福祉協議会の三者協定の締結手続きが事前に進められていたことが大きく、書類上は未締結だったにも関わらず、大学が施設を開放するという「英断」が寄与したものでした。

（写真2）連携の契機となった災害対策本部会議

（写真３）自衛隊との情報交換

（写真４）大学構内に設置されたWFPの大型テント

（写真５）情報集約の場となった大学構内の一室

（写真６）物資倉庫として使用された野球部の屋内練習場

3. NPOの連携

3-1. ＮＰＯだから出来たこと

■ ボランティアとＮＰＯ、NGO

東日本大震災という未曾有の事態において、市町村の行政側も著しい被害を受けた上に、多岐にわたる対応を迫られました。その中で石巻をはじめとする被災地では、各地から集まったボランティアが復旧・復興活動に大きく貢献しました。特にＮＰＯ（非営利組織）・ＮＧＯ（非政府組織）は、団体の強みである組織力や災害救援のノウハウを生かした活動を展開し、情報共有を行いながらさまざまな支援を行いました。

ＮＰＯ、NGOならではの
迅速な行動と組織的な解決能力

1. 組織的な大規模活動

１日に百人単位で活動するＮＰＯが石巻に複数集まったことで、限られた時間の中、より大きな調整が行えました。マッチングが必要なＶＣにとっても、各ＮＰＯのリーダーと話をすることで一度に数百人の動きが調整可能でした。

2. 組織の自己完結性

緊急期に集まった団体は、出発地でボランティア保険に加入し、移動手段はもちろんのこと、食料や宿泊所、必要器材まで自己完結を原則として、迅速に支援を開始しました。

3. 一貫性と持続性の担保

参加者に入れ替わりがあっても各団体内で業務管理や引継ぎが行われたため、物資倉庫やテントサイトの管理（共同トイレ清掃等）、地区ごとのニーズ調査や清掃活動の継続的な実施が可能となり、支援活動に一貫性と継続性が保たれました。

4. 様々な特色・専門性を活かした活動（P12.13 参照）

物資の調達、大量の人員派遣など、組織ごとの特色がうまく連携した他、個人の特技を活かし現地結成された「整体チーム」が避難者の声を吸い上げ、ニーズ共有をしたり、看護師や臨床心理士が専門的なアドバイスをするなど、専門性を持ったチームも活躍しました。

■ ＮＰＯと VC をつなぐプラットフォーム

災害支援のノウハウを持つＮＰＯが集まる連絡会議の事務局機能を地元の青年会議所（ＪＣ）関係者が中心となって引き受けたことにより、地元のＶＣと市外のＮＰＯが自然に連携・協力できる体制が構築されました。

3-2. 連絡調整会議「全体会」

■ 連携調整の基盤を作った全体会

3月20日より毎日、7月からは少しずつ頻度を減らしながら翌年５月6日まで、計282回開催された「ＮＰＯ・ＮＧＯ連絡調整会議」＝全体会。そこでは支援活動に関わる様々な情報が共有され、活動の方針などが協議されました。

全体会の内容

〇各団体からの支援活動内容、活動人数、(泥出し等の)完了件数の報告
〇各団体が活動を通して得たニーズに関する「情報」や各地区の状況・問題の共有
〇市内の概況、災害対策本部等から入手した「情報」の伝達
〇必要性の高い物資や活動に必要な備品等に関する要望の集約

→ 事務局が議事録として記録し、WEB で公開

震災直後の混乱の中では、市外から来る支援者が的確に被災状況を把握するのは困難であり、行政や社協が持つ情報とＮＰＯが収集する情報が共有された全体会は、非常に貴重な場として機能しました。

■ 各団体代表者が参加

全体会の参加者は、石巻専修大学３階ホールでの実施当時は各団体代表の他、個人ボランティアも参加して 100 名を超すことも。4 月 7 日以後からは 1 階教室に移り、ＮＰＯ代表者のみの 30 名程度によって開催されました。オープンな会議で、新しく支援に入った団体、ボランティアが情報を入手するための入口としても、有用な場になりました。

全体会が上手く機能したと考えられる要因

- ●震災前に整備された石巻市、社協、石巻専修大学間の災害協定準備 ➡ 連携調整のための「場所」の存在
- ●社協／ＶＣの柔軟なＮＰＯ受入れ方針 ➡ 「ＮＰＯ・ＮＧＯ連絡会」の呼びかけとその後の連携
- ●災害支援経験豊富なＮＰＯの存在 ➡ 活動に必要なノウハウやアドバイスの提供
- ●地元ボランティアの事務局参画 ➡ 地元情報、人的ネットワークを駆使した調整
- ●個別の団体では対応しきれない大規模災害 ➡ 情報共有・連携なしでは活動が成立しない状況

■ 全体会から分科会へ

全体会での情報共有に引き続き、同会場にて各団体が活動分野ごとに翌日の活動予定等をすり合わせする分科会を開催しました。

分科会ごとに車座で話し合い、支援の在り方や被災者との関わり方など、活発な意見交換がなされ、分科会同士の情報交換や交流も頻繁に行われました。

物資配布・ローラー

震災直後の在宅者サポート

震災直後、主に避難所外の在宅世帯を訪問調査し、必要な物資を迅速に届けました。市による在宅コミュニティへの弁当・物資配布開始を受けて、５月の連休に分科会としての物資配布活動は終了し、次のステップへ移行しました。

復興マインド

前向きな心を育む

被災地の状況が刻々と変化する中で、地域の行事・イベントの支援や花植え等の活動を行い、一緒に笑ったり時として真剣に話し合いながら、復興に向け前向きな心を育む、ＮＰＯらしい取組みが展開されました。

メディカル

災害後の健康維持

小規模の医療団体や医師・看護師らの有資格者が石巻に入り、地域の医療機関や行政と連携を図りながら、避難所訪問や地域医療活動が行われました。専門的な知見を持つ団体と協働できたことは、他団体にも非常に有益でした。

炊き出し

７ヶ月で合計878,000食

震災直後は被災者への食料提供が緊急の課題となる中、日本中から多くの炊き出しボランティアが集まりました。緊急期を過ぎてからは、自炊を促すため食材や器材を提供するなど、実施団体が方針を共有して活動しました。

石巻で活動した13分科会

～「専門性」を生かした支援、「点」から「面」へ広がる支援～

全体会「ＮＰＯ･ＮＧＯ連絡調整会議」では、支援のフェーズに合わせて 13 の「分科会」ができ、被災者のニーズや支援状況に関する情報共有や団体間の連携調整が行われました。

国際連合等が調整役となる海外の大きな災害支援現場では、物資配布、保険・衛生、教育などのクラスター（分野）に分かれて調整会議を行うのが一般的ですが、石巻では、クラスターにあたる分科会の枠を超えた協力体制が組まれ、行政との情報共有や連携調整が、一段と効果的に行われました。

マッドバスターズ

VC と NPO の連携による「目に見える」貢献

行政の委託業者が公道の瓦礫を運搬する一方、ＮＰＯやボランティアで構成した「マッドバスターズ」が私有地や民家からヘドロ、家具、災害廃棄物を運び出しました。道路が廃棄物により占有されるのを避けるため、ダンプや重機を活用して一次処理場への運搬まで行うＮＰＯもあり、迅速な清掃につながりました。地域ごとに床下清掃や側溝清掃も活発に行われ、ボランティアが黙々と作業する姿は住民を勇気づけ、復興に向けた力となりました。

漁業支援

養殖の街、復活に向けて

雄勝や牡鹿半島の漁港を中心に、震災で大量に散乱した漁具の回収や瓦礫の撤去などが行われました。また、わかめ、牡蠣、ホタテの養殖準備をサポートするなど、早期の漁業再生の一助となりました。

リラクゼーション

くつろいだ雰囲気づくり

整体師、鍼灸師、柔道整復士、美容師等の専門性を持つボランティアや足湯を用意する団体が、被災した方にリラックスできる時間を提供した他、被災者から生のつぶやきを聞き取り、情報を持ち帰る役割も果たしました。

心のケア

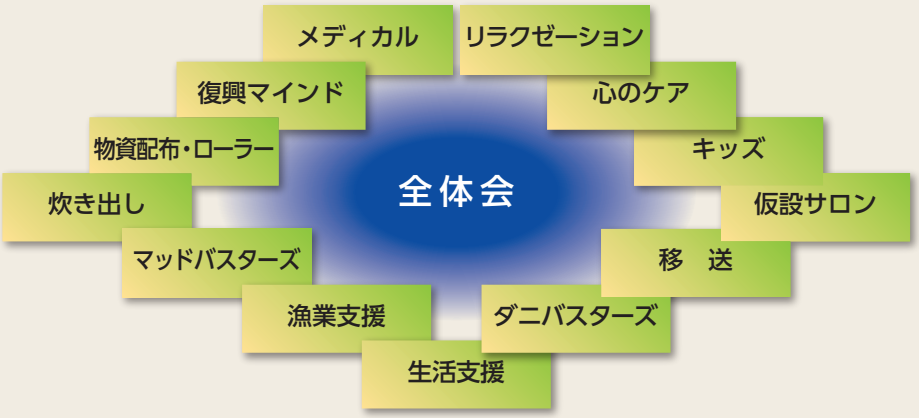
震災の精神的負担を軽減

臨床心理士、ケアワーカー等の心理サポートの専門家や団体が集まり、リラクゼーションチームとの連携等による自然なコミュニケーションを通じて、精神的な負担を和らげるサポートが行われました。

キッズ

未来を担う子どもに笑顔を

震災経験の上に、生活環境が変わり自由に遊ぶこともできない子ども達のケアを目的に、移動図書館、音楽ライブ、紙芝居、学習支援、イベントにおけるキッズスペース設置等、様々な活動が実施されました。



仮設サロン

コミュニティ形成サポート

仮設住宅の集会所や談話室にて、お茶会や体操など多様な活動を通して住民同士の交流機会を提供し、自治会形成を促すなどコミュニティ作りをサポート。活動の規模は変化しながらも、個別での支援は現在も続いています。

各ＮＰＯの活動は多岐にわたり、「分科会」に分類出来ない独自活動も沢山ありました。
また、拠点の整備、倉庫の管理、ボランティア向けの炊事などの直接被災者に関わることはないものの、欠くことの出来ない後方支援にも多くの方が従事しました。

生活支援

日常生活に密着して

石巻、女川地区の全仮設住宅に対する入居前の生活用品の搬入や仮設住宅への引越し補助、避難所の網戸取り付け、入浴支援の提供等、大規模な活動から細かいニーズに応えるものまで幅広い支援が提供されました。

ダニバスターズ

寝具衛生改善チームを結成

赤十字病院からの報告を受け、避難所の衛生環境改善に向けた合同チームを結成。避難所での清掃活動、毛布提供と寝具乾燥を行いました。また、保健所や赤十字病院、外部専門家との連携により有効な活動が行われました。

移　　送

病院送迎や入浴介助も

移送支援を専門とする団体により、移動が困難な方に対し、病院などへの送迎サービスが提供されました。住民が仮設住宅や復興住宅に移った後も、行政や関係団体と調整し活動を変化させながら現在でも継続しています。

3-4. “想い×経験”の結晶として（座談会）

東日本大震災
NPO の緊急救援活動を振り返る座談会
in 石巻
2013.1.9　石巻専修大学

『石巻モデル（方式）』と呼ばれた連携調整体制。その確立に関わった石巻市社会福祉協議会や支援団体のリーダーに集まって頂き、東日本大震災発生直後の緊急対応期の活動を振り返りました。

今後の災害救援活動の参考資料となるように、『石巻モデル（方式）』ができるまでのプロセスや成果について、当事者の皆さんに意見を交わしていただきました。

井上） 本日、ファシリテーターを務めさせていただきます、日本総合研究所の井上です。皆様よろしくお願いします。私自身は４月 20 日に、吉村さんを頼る形で石巻に初めて入りました。

企業のＣＳＲ戦略等に関わっているので、現在も断続的に被災地を訪れては現地のニーズを調査しながら、企業とＮＰＯを繋げる、という活動を行っています。

災害が起きたら、何も言わないでも全国から自然に集まってきてくれる、「日本の白血球」とも言える皆さんのような存在が今の日本にはいる。絶対に誰かが助けに来てくれる、そういう見えないシステムが出来上がっているんだということが一番感動したことです。それは阪神・淡路大震災以降の大きな変化だと思います。

想定されている東南海地震を含め、今後災害が起きた時、支援に入るＮＰＯは何に気を付ける必要があり、受け入れる立場としてはどんな備えをする必要があるのでしょうか？この石巻で起きたことを振り返りながら、本日はそのことを考えていきたいと思います。

まずは、皆さんがいつの段階で動き始めて、どういう経緯でこの石巻に辿り着いたのか？　３月 20 日に“ＮＰＯ・ＮＧＯ連絡会”という体制が初めて立ち上がりますが、そこまでの経緯をお伺いしながら、２年前の支援の開始時を再現してみたいと思います。

初動、石巻へ

吉村） 私が地震を体験したのは東京でした。石巻に辿り着いたのは夜中(3/12) の２時半くらいで、その時、消防署からも話を聞いたのですが、情報がまだ全然外に出ていませんでした。

三陸道から日和山の向こうを見ると空が真っ赤になっていて、「何かが燃えているのだろう」と考えていると、ラジオから「気仙沼で住宅地に火が燃え移っている」と聞こえてきました。

そして消防のサポートが出来ないかと気仙沼へ向かい、到着したのが朝５時でした。

井上） 吉村さんは発災から１時間程で東京を出発されていますね。

吉村） ３月９日にも地震があり、その時に変な胸騒ぎがして機材を沢山積んでありました。黒澤さん等も常に緊急支援機材を積んでいますが、その時に積み足しをしています。

井上） なるほど。黒澤さんはいつから動き出されたのですか？

黒澤） 震災発生時には宮城にいたのですが、自分の車に十分なガソリンがなく、そのことをツイッターでつぶやいたところ、新潟のボランティア仲間がわざわざガソリンを届けてくれました。

被災地に向かおうとしている仲間のボランティアとも連絡を取り、以前から災害救援で関係のあったＮＰＯが名取市にありましたので、とりあえずそこを集合場所にしました。私も当日夜に入ることが出来ましたが、名取市の閖上地区などはボランティアが入ってどうこうするような状況ではありませんでした。

そして名取市ＶＣの立ち上げ支援の後、被害が大きいとの情報で石巻に移動することにしました。そのころ名取で合流しため組ＪＡＰＡＮ（以下、め組）にも石巻に行くようにお願いしました。

谷口） め組は 13 日に 2,000 人規模のイベントを開き、そこで募金を募る傍ら物資を集めて北上し、私以外の数人が 15 日に名取市に入っています。別働の私は山形を経由する一般道を走って、16 日夕方に石巻の湊小学校に到着しました。

吉村） 早くに着いた数人が先遣隊と

石巻市社会福祉協議会
阿部　由紀 氏
社協組織としても被災している状況下において、ボランティアの窓口として状況に合わせた柔軟な調整に尽力。

日本財団
黒澤　　司 氏
数多くの災害支援活動で培った知見を若手ボランティアに伝授。長期活動における精神的支柱の役割も果たす。

ピースボート災害ボランティアセンター（PBV）
小林　深吾 氏
炊き出し調整を含めＮＰＯ・ＶＣ・行政・自衛隊との渉外広報に能力を発揮する。

みらいサポート石巻
大丸　英則 氏
自宅・自社共に被災。石巻災害復興支援協議会の設立時より奮闘し、ＪＣ理事長の立場からも復興に従事。

め組ＪＡＰＡＮ
谷口　たもつ 氏
災害時のみならず、以前からの各地における植樹経験を活かし、石巻にて新しい植樹の形を企画している。

して湊地区を見に行き、状況を流してくれていますよね。

谷口） はい。その先遣隊と湊小学校で待ち合わせました。到着した時はすでに暗かったのですが、声をはりあげたら懐中電灯の灯りがパーっと点いたんです。その時 1,600-1,800 人の避難者がいて、乗ってきたトラックに積んであった水などの物資を全て降ろしました。

井上） 情報の行き来が常にあったのですね。山本さんはピースボート（以下、ＰＢ）として、どの様な動き出しだったのですか？

山本） 私も小林君も発災時は東京です。ＰＢの災害支援は恒常的な活動

ではなく、ケース毎に立ち上げては終了してという形でした。

今回はすぐに出動を決めましたが、東北に土地勘もありませんでしたので、とりあえず山形にベースを作ろうと考え、行く宛てを探しつつ小林君らが出発しました。その後、救援物資として集めていた毛布と共に、行先を決めぬまま私も東京を出発しました。

北上していたある時点で、石巻にＶＣが立ち上がっていて、そこの阿部さんという人が毛布を受け入れてくれるらしい、との情報を得ました。それで、とりあえず石巻へ行こうと決まり 17 日の夜中に到着しました石巻が本当に右も左も分からず、そのまま総合運動公園で野宿をして、専修大学に来たのは 18 日の朝です。吉村さんや神戸からの仲間もいて、「被災地でしか会わないね」と話しているうちに阿部さんにお会い出来ました。

小林） その頃には、私も連絡を受けて石巻を目指しており、石巻市役所で待ち合わせて 18 日の昼に合流しています。

井上） 石巻でＶＣが立ち上がったのは、何日だったのですか？

阿部） 15 日です。

何も無いなかで…

井上） ＶＣというのは立ち上げたら、内閣府のボランティア連携室などへ連絡する事になっているのですか？

阿部） 連絡も何も、発信する術が無かったので通知は出来ませんでした。

本当に何もありませんでした、電話・ＦＡＸ、それに電気もなかった・・・無線だけが唯一あり、その後、発電機をチャーターしました。ただ、事務局長 (*1) が「せめて電話か何かでも」と動いて、衛星電話を市から設置してもらえたのが３月 15 日です。その時に初めて市と連絡が取れるようになって、ＶＣ立ち上げの許可をもらいました。

井上） ＶＣを立ち上げるには市の許可が必要で、社協の独断では出来ないのですね？

阿部） そうです。市と協定を結んでいるので、許可というより要請があります。宮城県では平成 15 年くらいからの取り組みがあり、全域で知事・市長・市町村社協の会長との間で覚書を交わしています。

それにしても、当時はただ立ち上げただけなのに皆さんよくＶＣがあると分かりましたね。

山本） 内閣府のボランティア調整室経由だったと思いますが、その頃はボランティアが入るのは時期尚早だということで、ＶＣが受け入れをしているという話も全くなかったと思います。

ただ、すでに動き出している方々の情報ネットワークがありました。

井上） 黒澤さんは活動時において、幾つもの発信・情報網を使用されていますよね。

黒澤） そうですね。吉村さんとは発災直後からメールでのやり取りをしていましたし、情報を伝える手段としてはツイッターも有効でした。石巻がどのような状態なのかと言う情報も入ってきていたので、石巻にＶＣが立ち上がった事やＰＢが活動を始めた事も、早くから知っていました。

井上） なるほど。その様に、これまでの経験の積み重ねが活かされている訳ですね。原田さんは災害ボランティアに携わるのは初めてという事ですが、どの様に情報を得て行動したのですか？

アモール石巻
原田　豊 氏
個人ボランティアを束ね泥出しを中心に展開。BIG UP石巻を新設し、地元と共に歩む活動を継続している。

オープンジャパン
肥田　浩 氏
石巻での活動中も真っ先に他地域の災害現場に向かい、心遣いと思いやり豊かな支援活動を迅速に行っている。

ピースボート災害ボランティアセンター（PBV）
山本　隆 氏
圏外からの大量のボランティアコーディネートに手腕を発揮、ＰＢＶを立ち上げる。

オープンジャパン
ヒューマンシールド神戸
吉村　誠司 氏
国内外における支援経験を活かし、災害ボランティアの情報共有の場つくりに奔走。

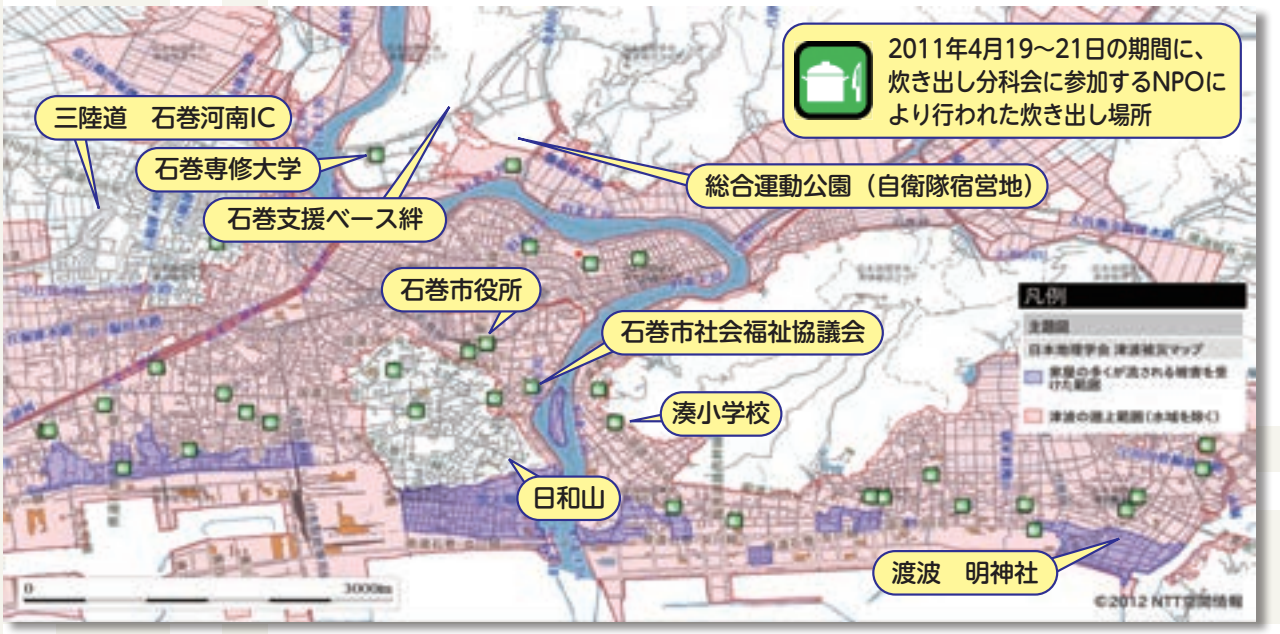
日本総合研究所
井上　岳一 氏
（ファシリテーター）
今後の社会と企業のあり方を考えるために、東北の復興過程を見守り続けるコンサルタント。

＊注釈
(*1) 大槻英夫氏
石巻市社会福祉協議会事務局長として同建物自体も被災した中、石巻専修大学でのＶＣ立ち上げと機能維持のために奔走する。

原田） 何か行動しようと３月下旬に決心し、どこへ向かうかを県外から調べていましたが、２つ３つの市でしかＶＣを見つけられませんでした。その中で、石巻のＶＣだけは電話番号が多く書いてあったので目に留まりました。
すぐに電話し、「1 週間後に行こうと思っています、どのような物資が必要ですか？」と尋ねると、「スコップと長靴とゴム手袋とバケツが欲しい」ということでしたので、それらを集めて４月３日に石巻専修大学へ来ました。
私は一個人のボランティアとして来て、ほとんど何も分からないような状態だったので、当初は「物資を渡したら帰ってもいいかな」くらいに思っていました。が、実際はそのまま今に至るわけですが…（笑）

ニーズ票との関わり

井上） どの様な活動から手を付けていったのですか？
山本） 最初は資金が無く、まず始めたのは街頭募金でした。そして神戸からの経緯と成行き上、私が指揮を執ることになりました。
最初期のオペレーションは殆ど元スタッフで回していたのですが、現地を見て大量のボランティアを集める必要に駆られ、20 日に東京へ戻り調整を始め、石巻でも同時に動いていました。
黒澤） 私はそれまで別行動をしていた吉村さんと、ほぼ同時に石巻に入り、南境にある地域の集会所を拠点として借りられることになり、“石巻支援ベース絆”を設置し活動を開始しました。それが後の（一社）オープンジャパンの礎となります。
まずは避難者が多かった湊小学校で、体育館内に流れ込んだヘドロの掻き出しを、新潟のボランティアチームが運んでくれた重機や除雪機を使って行いました。
その後、活動仲間の四万十塾 (*2) メンバーが中心となって炊き出しを開始しました。初期の頃は場当たり的にやっていくしかなく、石巻小学校横のお寺にＶＣのサテライトを設け、ニーズ票を元に市街中心部のヘドロ出し作業を行っていました。
井上） それは、ＶＣのサテライトを黒澤さんたちが運営していたということですか？
黒澤） 社協傘下として、立上げ間もないＶＣを支えるかたちで協働していました。ＶＣ本体は津波被害の無かった石巻専修大学内に間借りしていたので、遠方からようやくたどり着いた多くのボランティアの作業効率を考え、より作業現場に近い位置にサテライトを設けて、本体機能の一部を補いました。作業内容としては既にＶＣが集めた被災者からのニーズ票を元にして、どんどん送り込まれてくるボランティアを捌きました。
井上） 阿部さん、どうしてそんなことが任せられたのですか？
阿部） 黒澤さんには平成 15 年の南郷水害の時、現場のニーズに素早く対応していただいたことがありました。そんな経緯もあって黒澤さんなら大丈夫だと思い、お願いしました。
井上） その頃、市民からのニーズはどの様に集まってきたのですか？
阿部） その時には電話で受け付けが出来る状態でした。その他は皆さんのローラー活動 (*3) でしたが、主にめ組が中心となって集めてくれたと思います。
谷口） 初期の 1、2 週間はローラーで順々に避難所から回り、その後、多くのボランティアが入って来る頃には、個人宅（在宅避難者）のニーズを取っていました。
原田） 個人宅に白紙のニーズ票を置いて行ったのを覚えています。炊き出し等でも、訪れた場所にニーズ票を残していったりしていましたね。
阿部） 現場処理のパターンも多く、例えば個人宅の泥出しをしていれば、それを見た近所の方も「次はこっちをお願いします」となってくる。その場にニーズ票があり、その場で書く。ニーズ票というのは段々と後出しのようになっていきました。



＊注釈
(*2)20 ページ、コラム参照
(*3) ローラー
ＶＣへ連絡する術が無い方も多く、ボランティアがニーズの聞き取りを隅なく行った。
(*4) 草島進一氏
多くの災害支援に携わり、常にＮＰＯとの交流を重ね防災活動に取り組む。
(*5) 伊藤秀樹氏
ＪＣ ＯＢとしての人脈を活かし、地元とＮＰＯの繋ぎ役としてＩＤＲＡＣの設立に奮闘。

“ボランティア”の立場だから出来たこと。

熱い想いと特殊スキルを備えたＮＰＯをどの様に受け入れるか。

第一回連絡会議、開催へ

吉村） 炊出し、泥出しについても効率を考え、活動エリアの担当分けが段々とはっきりしてきましたよね？

井上） 担当分けの背景として、ある程度の連携体制が始まっていたという事ですね。では、その連携の体制を作ろうとなったのはどういう経緯ですか？

吉村） 私も関わった元のアイデアとして、阪神・淡路大震災の時に、被災圏で活動する 130 団体くらいのＮＰＯが連携した地元ＮＧＯ救援連絡会議というものがありました。

黒澤） 当時その救援連絡会に登録していた団体数は、最終的には百数十になっていたと記憶しています。“石巻支援ベース絆”の立上げに関わった一人で、山形県から来た草島進一氏(*4)より、「支援団体による連絡会を立ち上げてはどうか？」との相談を受けました。

そこで第一回の会議メンバーは、私と草島さんと吉村さんとで決めさせていただき、その経緯から草島さんが連絡調整をして初期の議事進行も執り行っていました。

井上） 第１回会議は３月 20 日と記録されていますね。

阿部） そうでしたね。

「こういうの（連絡会）をやりたいのでやってもいいか」と、前日の 19 日に相談されました。

黒澤） まだまだ現場を離れられない状況でしたが、それでも取りあえず夜にでも集まろうという事になり、その時にメンバーとして地元からは青年会議所（以下ＪＣ）を必ず加えるようお願いしました。

井上） それはどうしてですか？

黒澤） 石巻圏外から支援に入った団体はいつか撤退します。その時に継続して支えていくのは社協であったり、ＪＣなどの既存の地元団体なのです。特にＪＣは異業種の集まりで、組織の指示系統がしっかりしており、過去の災害被災地でもその復旧・復興には大きな力を発揮しています。この震災以前から、石巻ＪＣとは過去の災害を通して連絡しあえる関係ができており、会議に参加したＪＣのＯＢである伊藤さん(*5)には、外部のＮＰＯに対しては地元の団体として損得抜きで全面的に協力してくれるよう依頼しました。

阿部） 伊藤さんは「那須の水害などで手伝ったことがあるから、自分にも出来る事があると思うので何か手伝えないか？」と、17 日には一度社協を訪ねて来ていましたね。

吉村） 連絡会議でＪＣの参加が始まったのはいつからでしたっけ？

小林） 21 日の第２回会議からは伊藤さんと斉藤さんが、その翌日からは窪木さんと大丸さんで、ＪＣから４人が加わったと思います。

その第２回会議の時に、阿部さんから「事務局内を手伝ってくれる人材が欲しい」と言われました。

阿部） ＶＣ内の仕事を手伝ってもらえないかと話をしましたね。

２日目まで進行役をやってくれた草島さんが帰らないといけなくなり、そこで小林さんに白羽の矢が立ったわけです。

小林） あれは無茶ぶりでした。（苦笑）

山本） 彼には「どんな事でも構わないのでＶＣ内を手伝ってくれ」と、言って後を任せました。

阿部） 一番助かりましたね。膨大な炊き出しの調整が必要でしたが、実は一番そこが面倒な部分なんです。食数も期間もメニューも違いますから。

それを小林さんに丸投げの状態でした。小林さんはそれからが大変。

井上） その要請は社協からＰＢへしたのですか？

小林） 連絡会議の中でそのことを話し合い、ＰＢとして私を派遣するという話になりました。

その時に議長を伊藤さんへ引き継ぎました。

井上） 伊藤さんが連絡会議の議長を務め、中の仕事は小林さんが回すという体制になっていく訳ですね。

山本） 小林君とも話していて、「議長の座にＰＢがいるのは正解ではない、地元の人が立つならどんどん地元に」と考えていました。

全体像把握と学びの場

井上） まがりなりにもその様な体制が出来上がった事で、どんなメリットがありましたか？

阿部） まず情報がシェアできた事。誰が何処で、どんな臭いの中で戦っているのか。不足している物や、人的な割合、次に何が起こるのかを皆で共有できたとは思います。

谷口） 全体像が見えましたね。

井上） 全体の把握は統率する側にしてみると当然すごく良い場ですが、参加している側にとってはどの様な良さがあったのですか？

原田） 他の地域で起こっていることは、自分の活動エリアでも、いつ起こってもおかしくありません。

私などは特に、次に何をすれば良いのか、何が起こるのかが分からなかったので皆さんの話が教科書代わりでした。それをまた他のボランティアさん達に伝えて、という形です。ある種の学びの場でしたね。

山本） 何かしたい人がそこを目掛けて来る。圧倒的に様々なリソースが集まって来ました。

原田） 活動内容が多岐にわたり、より細分化した“分科会”が出来たこともあり、新しく来た人もその場で最新の活動状況が理解できた筈です。

谷口） め組も含め、多種多様なボランティアの受け皿としても十分な機能を発揮していました。

阿部） 初期の頃から多様な技術を持った人達も含め、様々な人が様々な活動をされていました。こちらはお願いする側ですが、ボランティアさんは自由ですし、それぞれに出来ることを見定めて活動されていましたね。

吉村） 自分だけを振り返っても、確かに色々やりましたね。今回は重機

を扱える人が結構流れてきたんじゃないですか？
黒澤）重機をダンプトラックに積んで多くのボランティアが集まって来たのですが、中には他のＶＣに活動を申し出たが、断られて石巻に来たケースも少なくありませんでした。
阿部）黒澤さんも、ずいぶん重機をオペレートされていましたよね。
黒澤）津波による被害で被災地では動ける車両も少なく、ヘドロ出しのボランティアの輸送にはトラックを使用したこともあります。
そんな泥だらけで活動するボランティアの姿が、結果として被災者への勇気づけになったと確信しています。また、ボランティアの頑張っている姿を意図的に見せることも、精神的にも疲弊した被災地での活動としては有効です。市民の方もボランティアの車両と分かると、優先的に道を譲ってくれることもよくありました。
阿部）一般のボランティアが安全に活動するために、先行して重機やトラックを使う技能系ボランティアが必要だと感じられる場合も多くありました。
黒澤）重機などをボランティア活動で使用するには、それなりの法的な根拠が必要です。壊してしまっては取り返しがつかない訳ですから。ボランティア活動だからといって、決して何でも良い訳ではなく、紙に書いたものではなくても、その活動に対して何らかのしっかりとした根拠が必要なわけです。重機で動かす物のひとつひとつに必ず所有者が居るので、これはとても大切なことです。
山本）うまく事が運ばなかったところもあると思います。どんな人が来るか分からないのですから。
阿部）聞いたことのある団体もいましたが、そうでないところも多くて、これは大変申し訳ないのですが、一瞬は皆さん、うさんくさく見えてしまうんですよ。（苦笑）
過去の支援経験を誇張される個人の方も何人かいらっしゃいましたね。
黒澤）多くのボランティアは、ＶＣを運営している社協の福祉団体としての性質をあまり理解していません。なので、自らが考えている災害現場の活動と、ＶＣ（社協）としての立場との両立を考えた行動や気遣いをするようにと伝えました。そのことは社協自身からはなかなか言い難いことでもありますし。
阿部）ある時、黒澤さんが「なんでもやっていいわけではない、勘違いするなよ」と、ボランティアを一喝してくれたことがありました。
私たちはお願いしている立場上、言えなかったのですが、「あくまで自己完結、自分で安全を守らなければならない」と、何度となく注意を促してくれています。
山本）最初の頃から６月くらいでしょうか、ある程度リスクの高い活動をしていたと思います。人・物・資金を集めないと泥なんか無くならないですし、「ここまではやろう」という目途が無いと頑張りも効かなくなります。
阿部）いつ終わらせるかの話が出たときに、石巻全域の住宅地図を広げ、「全部に印が付いたら止めましょう」と話しをしました。
ニーズ票を集め、作業に入った家や取り壊しを決めた人の家を色分けしていき、地図の全体に色がついた時にはＶＣとしても一定の“けり”になる。それを事務局長も理解してくれました。

集える“場所”

井上）多くのボランティアが石巻専修大学を目指したわけですが、被災地域からは少し遠いですよね。
黒澤）石巻に着くまでは、なぜ被災地域から離れている石巻専修大学にＶＣを立ち上げたのか疑問を持っていました。私は被災地域になるべく近いところにＶＣを作るのが持論でしたから、地理的に少し中心部から離れ過ぎているなと感じました。
しかし実際に来てみれば、あらゆる条件を備えた最高の環境でのＶＣだと気付きました。
谷口）地理的に安全で自衛隊にも近く、広い駐車場もあってキャンプを設営できたのは、こちら側としても大きなアドバンテージでした。
山本）私は別の意味で、被災地のど真ん中にはＶＣを作らないことが良いと考えています。
ボランティアは１週間以上その状態のプレッシャーにさらされると、燃え尽きると言うか、感覚がおかしくなってしまうんですよね。やはりクールダウンが必要で、ＰＢでは１週間で被災地を離れるローテーションを組んでいました。
ベースキャンプを石巻専修大学に設営出来たことも合わせ、ある程度オンとオフを切り離せたと思います。
原田）ボランティアの為の支援も入ってきて活動が継続できたのですが、毎月毎月ここのテントサイトが閉鎖する、しないと噂があって、実はびくびくしていたんですよ。
井上）いつまで開放してもらえるか、事前に決まってなかったんですか？
阿部）大変だったんですよ、交渉するの。（苦笑）
原田）毎月のように、キャンプや駐車できる場所がだんだんと限定されていきました。
阿部）いろんな所にいろんな物を建てたりだとか、目に付く事が起こるとそのたびに謝りに行って、土下座する勢いの時もありましたよ。
井上）集まっているボランティアの規律はどのように保っていたのですか？
一同）最初はゼロ（笑）
山本）建物が禁煙、構内が禁酒だったのは大きい。石巻専修大学は色々な意味でキーでした。

よく信用するよな、と思っていました。

原田）ニーズ票を含めＶＣとすごく連携していましたが、時には個人情報も扱うわけで、社協もよく信用するよな、と思っていました。
井上）それはなぜ信用できたのですか？
阿部）信用してないですよ。（笑）
ただ、受け入れる側が、どれだけ頼み上手になれるかだと思います。社協で働く真面目な人ほど、どうしても一歩を踏み出せないのだと思います。

未曾有の災害規模が ネットワークを大きくした

当時、事務局長とのやりとりで、「皆さんにやってもらうしかない」と。その辺は、事務局長の判断の良さだったと思います。

吉村） 阿部さんのキャラクター自身も大きな助けになったと思います。それは真似できることではありませんが、やはり受け入れやすい体制のところに、人は集まるのでしょうね。

黒澤） 被災地側の“受援力”という言葉がありますが、被災地に足を運ぶボランティアの人数は、必ずしも被害状況の大小とは関係がない場合もあります。自分たちの活動の達成感であったり、ミッションが叶えられる環境も大切です。

社協のＶＣ担当者の裁量権も大きな要因です。社協上層部が現場担当者を信頼していればこその、大胆な活動だったと思われます。

阿部） 私らは何もしていないですよ。実際は調整だけです。

吉村） オフロードバイクで現場に駆け付けていたじゃないですか！

阿部） 現場に行き空気を感じて「あそこはああいう現場だからね」というのを知らないとダメなんです。

井上） なぜこれまで話して頂いたような、個人の動きや連携が出来たのでしょうか？

黒澤） いろいろと考えてみましたが、ひとつは“災害の大きさ”だと思います。もう一つとして、集まった団体の多くは個性をあまり強く主張せず、むしろ連携や協働を大切にしていました。

井上） ボランティアに対する眼差しが温かくなり始めたのはいつ頃ですか？最初からではないですよね？

山本） ４月ぐらいでしょうか。大クリーン作戦のあたりだと思います。

原田） まだあの時期なのに、市長が挨拶に出てきてくれましたね。

黒澤） あの活動は協議会が取りまとめ、1,000 人程のボランティアが参加した規模でした。行政にも一目置かれ、それぞれの団体が纏まってひとつの集団としての力を見せられたように思います。これは協議会の大きな成果ですね。一年間に石巻で活動したボランティアがのべ人数で 28 万人。そのうち泥出しが人数的には一番多かったと思いますが、市としては数億円規模の経済的な効果があったと確信しています。

原田） 伝統ある川開き祭りや地域のお祭りへの参加も、協議会があってこそ上手く出来たと思います。

吉村） 神社やお寺の再建が後回しだった頃、渡波の明神社でお祭りの手伝いを、肥田さんを中心としてさせてもらいましたね。今でも神社の宮司とその事を語り合います。

肥田） すごく小さな話なので…。

阿部） この話は大きい。最初、肥田さんから「宮司のひどく沈んだつぶやきが心配だ。少しでも活力が戻るよう、何とかお祭りくらいしたい」と相談されたのですが、その時はピンとこなかったんです。

でも当日に様子を見に行くと、倒壊家屋に囲まれ、ガラス破片が散らばっていた境内がきれいになっていた。赤ちゃんがすごく笑顔で座っていて、それを見て「ここまでやってくれた！」と、ものすごい感動に包まれました。

“石巻方式”と呼んだ人がいただけなんです。

井上） 緊急支援フェーズが終わった段階において、この様な連絡協議の場にはどんな役割があると思いますか？

山本） 何を目的にするのかですね。今回は解決しなければならない問題の膨大さが、有機的なネットワーク形成のキーだったと思います。

課題が余りに大きく、自分たちだけで解決できないから他の人たちと協働する。それが集まる人たちにとってもメリットでした。

阿部） “石巻方式”などと呼ばれますが、私たちは誰もそれを作ろうとした訳ではなく、そう呼んだ人がいただけなんです。例えばこの先「石巻方式が良いよ」と伝わるのはおかしな事で、石巻圏の人口・生活環境・文化、全ての事を併せた結果なんです。

黒澤） このように“何々方式”と言うのは、その結果であって真似をしようとしても、次の災害ではそのような形にはならないと思います。

ＶＣのマニュアルもそうですが、実際の災害規模に照らし合わせ、運用の仕方を考える知恵と経験が必要になります。被災した場所・季節・時間・風土・歴史など様々な要因があって、それにマッチし実行された結果が後に何々方式と呼ばれるだけです。

阿部） 私も講演会などで「マニュアルの必要性はありますか？」と聞かれた時は、「いらない」と答えています。やはり先ほどの通り、その時々で状況が皆違うので、一口に一本化して平面図では見せられません。そうではなくて、凸凹するのが人間の生活なのですから。

井上） 「石巻方式がいい」ではなく、皆がどう役割を発揮しあえるかが大事になってくるでしょうか？

阿部） 外部の経験のある人が、ＶＣ立ち上げに寄り添ってくれると助かりますよ、絶対。そういう方々に協力してもらえる、優先的な仕組みが必要だと思っています。

黒澤） 石巻市は社協にも協議会にも大きな裁量を与えてくれたと思います。それはボランティア活動をするうえで最も大切なことです。

その裁量に加え、物資であったりガソリンであったり、様々な面でもボランティアが動きやすいようにサポートを頂いたと思います。

自助のキャパシティーを超えたとき、受け入れ体制をいかに柔軟に出来るか。

井上） 最後に、この２年間を振り

返り、我々は何を伝えられるのでしょう？それぞれからのメッセージをお願いします。

阿部） 日本は災害大国であり、近年は異常気象などもあって様々なことが起きています。他人事だとたかを括らず、日本人として災害に強い知識と備えを持っていって欲しい。
今後の災害ボランティアの活動においても、その地域ごとの特性や違いをちゃんと理解することが大切で、経験があっても状況に合わせた謙虚さを持って行くべきなのです。

黒澤） 災害救援に特化した団体は未だに誕生していません。
次に大きな災害が起きたときに、今度は助けに入る側になる。
石巻の名の入った団体が次の被災地で活躍できるよう、そのような団体を創ることも外から入った団体の役割の一つかと思っています。

小林） 何かしたいとの想いが強い人ほど、基本的に柔らかくないといけないと思います。
その土地毎のやり方や文化に、どうやって自分たちを合わせつつ、盛り上げていけるのか。
各ＮＰＯも、それぞれ考え方や得意分野も違う中で、意見のぶつかりも沢山出てくる。それにどれだけ“柔らかく”あれるかです。
固い為にお互いが傷つけ合うことの無いように。

谷口） 今回は、ＶＣと協議会で受け入れるボランティアの住み分けが出来ていたのと、ボランティアが集える場所の隣に、社協があり協議会がありコミュニケーションと連携が取りやすい状況でした。
そういう意味でも“場所”は、個人ボランティアを受け入れる為の最大ファクターです。

原田） もちろん、起こらないことを祈っていますが、もし次の災害が起こった時にはもっと被災範囲が広かったり、このメンバーもバラバラに活動するかも知れません。
ですが私も今回より、早く質の高い動きができると思うので、何かが起きた際には横のつながりを生かしていきたいです。

大丸） 石巻ＪＣで現役・ＯＢあわせて体の動く 60 歳以下は 120 名ほどいるのですが、発災直後から自分の家族以外のことに時間をさけた人間というのは、10 人もいませんでした。皆、自分の事もままならない状況でした。この震災を経験した側としては、「備えと自助努力はすごく必要。でも、いつも自分たちだけで守りきれるとは思わないで下さい」と言いたい。だからこそ、いかに支援を受け入れるか、ボランティアの皆さんが集まり易い仕組みを作れるかが重要です。そして普段から広い視野を持って地域間で交流することが“備え”につながると思います。決して、自分の街の中だけで完結する事ではないのです。

肥田） つくば市の竜巻や、阿蘇、和歌山での活動で、それぞれの地域性に沿った初動だったり、多くの経験をさせてもらった中で、石巻で一緒に活動した仲間がそこに集まって、再びネットワークができた時、私も安心を感じました。また、つくば市の竜巻の時に「石巻から駆けつけました！」と伝えたら、「本当によく来てくれた」と感激されたのを良く覚えています。そんなつながりが、もっと広がっていく事を願っています。

山本） 何度も言われているように、石巻での連携の成果は結果でしかない。沢山の要素がたまたま上手く融合し、それが全員にとってのメリットとなりました。その中でも、やはり想いが集まることの出来た“場所”が存在したことは、とても重要な要素です。
また、地元の阿部さんや伊藤さんの存在がすごく大きい。彼らの存在があってこそ、私たちの活動に関する目的や意義がぼやけずにいたのだと思います。

吉村） 最初の現場を見ていると、よくここまで綺麗になったと思います。皆が協力・尊重し合い、笑顔を絶やさずに活動した結果です。が、次起きた時にどう出来るかというのは、想像がつきません。先日、ある人に「ボランティアはいつかいなくなっちゃうんだよね」と言われ、2 年近く関わっていても距離があるのだな、と感じました。
確かに街の泥は無くなってきましたが、3 年目の現場で何をすべきなのかをもっと考えていきたいですね。

井上） それぞれの立場での活動にお忙しい中、本日は貴重な現場の声を聞かせていただき、本当にありがとうございました。

〈コラム：関係団体からの寄稿〉

地球にやさしいライフスタイルの提案やカヌーガイドを本業にもち、炊き出しを中心に多様な活動を行った。

四万十塾　オープンジャパン
木村とーる

震災前に腕を骨折していたのですが、「片腕でも現地に行けば何かは出来る!!」と、ワゴン車にカヌーを載せて来石。すぐに炊き出しを開始しました。思えば勢いとは怖いものです(笑)

いずれいなくなる人間だけがフロントに立つのではなく、地元の方々が主導して炊き出しを開催できるよう、雰囲気作りを心がけました。“食事を作る”自体がエネルギーの循環でもあるし、一所懸命に働く姿は元気の素へと繋がります。

個性を活かす仲間たちと共に作り上げた心のこもった温かい食事、炊き出し総数は“111,165食”に上ります。

炊き出しにビュッフェスタイルを取り入れたり、生ゴミの堆肥化活動などに加え、船外機船が入れない港湾内では、カヌーイストの経験を活かして仲間と共に複数のカヌーを漕ぎ出し、海辺の瓦礫撤去も大規模に行いました。

個人ボランティア
中村真菜美

複数団体のボランティアコーディネートの他、団体間の連携調整、地域の催事の運営サポート等を担った。

光など誰にも見えなかったあの頃。私達は毎晩のように石巻専修大学の一室に集い、その日の活動報告や新たな情報、直面している問題について毎日遅くまで話し合っていました。

私が議長(*1)を務めた発災年からの１年間、個々の団体が自らの役割を果たすことに留まらず、時には団体の垣根を越え共に現場で汗を流し、地元の方々と一緒になって地域の催事や復興市、追悼行事の裏方をも担いました。

今では状況も移り変わり、毎日のように膝を突き合わせて集まることも無くなっています。でも、それでもこの場所で大切なことを見失わずに踏ん張って来られたのは、あの日々があったからではないでしょか。

共に手を添えるからこそ守れるものがある。それを体感させてくれた大切な場です。

(*1) 連絡調整会議（全体会 P13 頁参照）議長を 2011 年 5 月より務める。

地域医療の観点にて発災後間もなく来石。現在は石巻市の地域包括支援センターに籍を移し、保健師として尽力した。

ＪＩＭ−ＮＥＴ
川添　圭子

現地入りした当時はまだまだ急性期で、地域医療どころではないという雰囲気でしたが、石巻赤十字病院や市役所と協議を重ね、主に介護保険に関わる活動を開始できることになりました。

地域の保健師さん・ケアマネージャーさん達と連携して、もう兎に角動きまわって一地区の要介護度５から２の高齢の方、100 人程度を要フォロー者として素早く見つけ出すことができ、その内の 80 人ほどにサービスの提供を行っていました。

何より看護師２名という体制でしたので、取りこぼしの無いよう高齢者を訪問するので必死の日々が続き、何かを感じている暇もなかったのですが、介護サービスの一端を補完するとこで、医療系ＮＧＯとして地域に入り込んだ活動が出来ました。

特定非営利活動法人 JEN
西村真由美

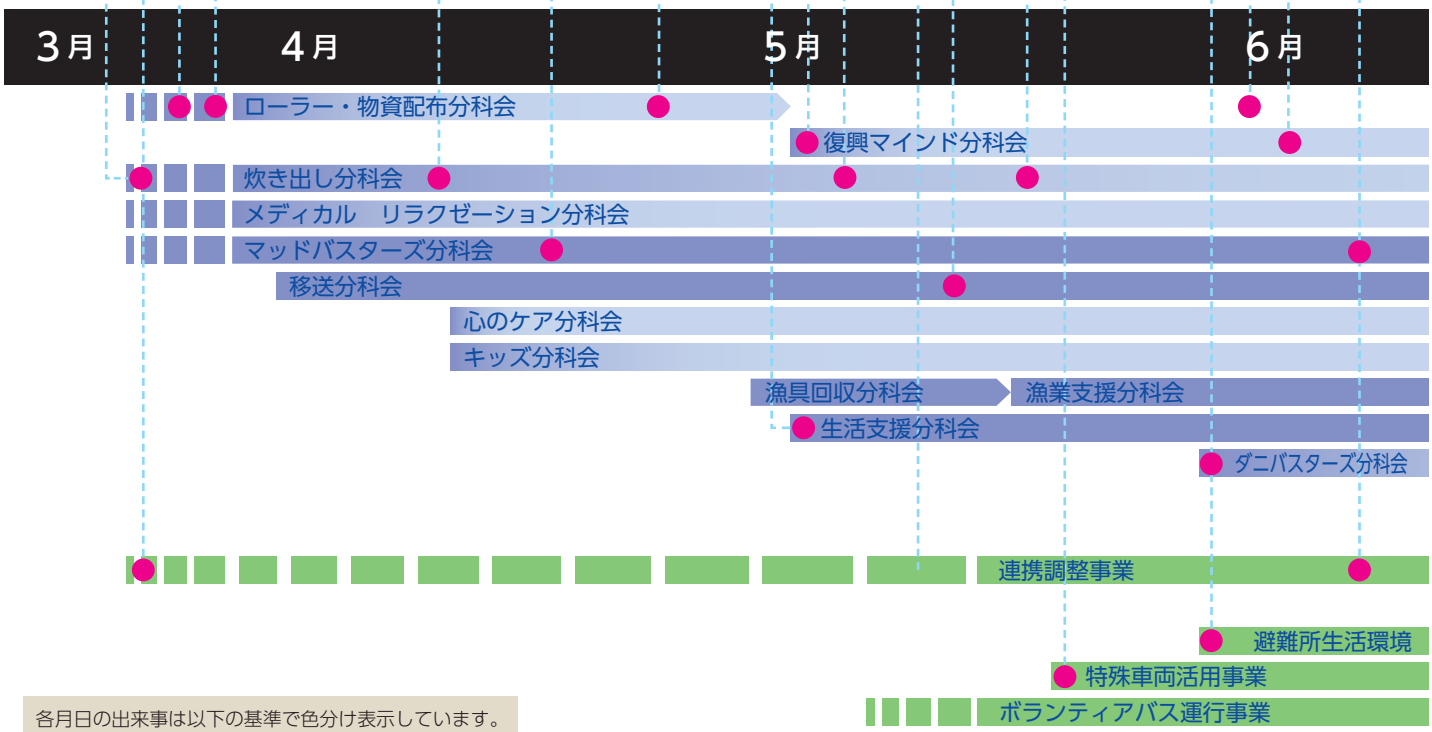
緊急期から自立を実現するまでのサポートを行うＮＧＯとして、地元出身スタッフと協働した。

発災直後より、炊き出し・物資配布・コミュニティ支援など、地元雇用を創出し、ひとりひとりの心の復興と自立に向けた活動を展開しました。沿岸部や牡鹿半島においては生活支援や地域課題解決のサポートも行い、石巻の復興と活性化に向け、地域の魅力や元々持っている自立力と未来への希望に心を寄せることを大切に、活動しています。

協議会という場を介し、志を同じくする多くの仲間たちと出会うことができました。多様なボランティアやＮＰＯ等がお互いのリソースを交換し、知恵を出し合うことによって、より良い支援を行うことができたのだと思います。ここ石巻で培われた経験は、必ず次の災害時においても活きてくるのだと確信しています。

4. 活動年表

3月11日	東日本大震災　発災
3月15日	石巻市災害ボランティアセンター立ち上げ
3月19日	自衛隊　炊き出し開始
3月20日	第1回NPO・NGO連絡会　開始
3月22日	石巻市　配布計画に基づく物資配布　開始
3月26日	物資輸送を行うNPOに対し証明書発行
3月30日	WFPから石巻市へ提供された大型テント　石巻専修大学に設置
4月1日	石巻市　市内の建設業者に対し「災害廃棄物処理業務」の委託開始
4月2日	防災科学技術研究所経由にてPC、複合機、webシステム等の提供
4月2日	「石巻災害復興支援協議会」に改称
4月3日	石巻専修大学テントサイト使用ルール作成（6月2日まで4回改定）
4月4日	市・自衛隊・NPOの三者協議　開始
4月7日	宮城県沖　震度6強の余震（石巻専修大学一時停電、断水）
4月9日	一般ボランティアとNPOがステッカー共同使用開始
4月10日	まちなかスマイルプロジェクト
4月11日	webサイトスタート
4月13日	テントサイト用車両許可証・テント設営証の発行開始
4月22日	石巻市　生活物資・弁当配布開始
4月22日	石巻市　自衛隊による炊き出しへ食材提供開始
4月29日	仮設住宅入居開始（向陽団地）
5月2日	仮設住宅へ生活用品配布支援開始（生活支援分科会）
5月5日	明神祭り　開催
5月5日	広渕小避難所からの自活要望により調理器具提供
5月10日	日本財団より2tダンプ4台到着
5月10日	宮城県「被災者支援四者連絡会議」への参加開始
5月11日	避難所巡回バス運行開始
5月13日	「一般社団法人石巻災害復興支援協議会」　設立
5月16日	倉庫にある食材をNPOの炊き出しへ提供開始
5月19日	日本財団より特殊車両到着
5月23日	思い出の品（津波による流出物）展示・引き渡し
5月30日	温帯低気圧通過　テント被害によりボランティア活動中止
5月30日	石巻市　NPOによる炊き出しへ食材提供開始
5月31日	ダニバスターズ分科会が発足。9月14日まで活動
6月1日	石巻市　物資配布カード導入
6月11日	こいのぼり祭り（飯野川小学校）
6月15日	石巻市　「倒壊家屋事業所等解体撤去業務」の委託開始
6月16日	慰霊祭前の一斉清掃（16日～17日）
6月18日	石巻市慰霊祭（百か日）



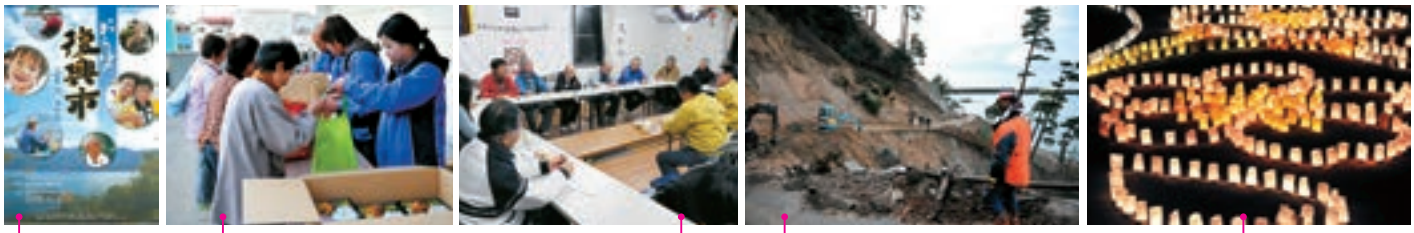
各月日の出来事は以下の基準で色分け表示しています。

〈赤字〉石巻災害復興支援協議会
〈青字〉石巻市関連
〈緑字〉社会福祉協議会関連
〈茶字〉IDRAC+登録団体関連
〈黒字〉その他

6月21日　ボランティア慰労会
6月27日　自衛隊　炊き出し終了
6月29日　第100回全体会
7月1日　石巻市社会福祉協議会「災害復興支援対策課」設置
7月1日　市役所「仮設住宅運営対策室」設置
7月3日　好文館高避難所　ＮＰＯと共同調理はじめる
7月4日　市・自衛隊・ＮＰＯの三者協議　終了
7月10日　全体会の頻度が週6日に変更
7月12日　石巻魚市場　水揚げ再開
7月26日　新潟・福島大豪雨（台風9号の影響）
7月27日　自衛隊　入浴支援撤退
7月29日　自衛隊　撤退
7月30日　新潟県三条市　豪雨災害支援
7月31日　福島県金山市　豪雨災害支援
7月31日　東日本大震災供養祭　流燈
8月1日　第88回石巻川開き祭り
8月1日　石巻市よりボランティア調整管理業務受託
8月10日　第1回仮設サロン支援連絡会
8月27日　県社協「災害復興支援コーディネーター研修」
8月30日　第150回全体会
8月30日　放射性物質汚染対処特措法　施行
9月1日　石巻市内仮設住宅循環線バス　運行開始
9月12日　和歌山県那智勝浦町　台風被害支援（12日～11月11日）
9月18日　石巻初　仮設住宅自治会発足（渡波第一団地）
9月21日　台風15号接近による避難勧告（冠水・土砂災害）
9月22日　石巻市支援物資倉庫　旧青果市場へ移動
9月28日　資材等輸送ボランティア証明書の書式改訂
9月30日　仮設住宅見守り隊（訪問支援員）活動開始
9月30日　物資配布カード終了
10月1日　石巻専修大学テントサイト閉鎖
10月11日　石巻市内全避難所閉鎖
10月11日　炊き出し調整終了

7月　8月　9月　10月

仮設サロン分科会
仮設サロン支援連絡会
請負（ボランティア調整業務）
改善事業（ダニバスターズ）
市民意識啓発事業
「おらほの復興市」支援事業
仮設浴場運営事業
震災の語り部事業
緊急支援 新潟三条・福島金山
緊急支援 和歌山



- 10月16日　おらほの復興市（p26参照）
- 10月19日　からころステーション　オープン
- 10月30日　「震災の語り部」Webでの受付け開始（p27参照）
- 11月8日　石巻市震災復興基本改革（素案）公表
- 11月10日　石巻市　生活物資・弁当配布　終了
- 11月11日　連絡会参加団体で「仮設への物資配布は出来るだけ控える」と合意
- 11月14日　第1回牡鹿支援連絡会開催
- 11月15日　第200回全体会
- 11月18日　おしかのれん街　オープン
- 11月19日　おがつ店こ屋街　オープン
- 11月23日　第1回在宅支援連絡会開催
- 11月27日　巨大缶詰の移動（p2参照）
- 12月1日　石巻市災害ボランティアセンター　専修大学より移転
- 12月9日　石巻仮設住宅自治連合会　発足
- 12月10日　石巻立町復興ふれあい商店街　オープン
- 12月19日　金華山　参道整備支援（19日～23日）
- 12月20日　コンパクトシティいしのまき・街なか創生協議会　発足
- 1月7日　石巻どんと祭　裸参り
- 1月22日　思い出の品物（津波による流出物）の展示終了
- 2月4日　災害ボランティアシンポジウム（県社協）
- 2月10日　復興庁　発足
- 2月24日　飲むっちゃ喰うっちゃスタンプラリーⅣ（p26参照）
- 2月27日　第250回全体会
- 3月11日　東日本大震災犠牲者石巻市追悼式
- 3月11日　祈りの灯り希望の灯り
- 3月22日　石巻工業高校　選抜高等学校野球大会出場
- 3月27日　石巻市ささえあい総括センター　設置
- 3月31日　宮城県　地上アナログテレビ放送終了

10月　11月　12月　1月　2月　3月

- 復興マインド分科会
- メディカル　リラクゼーション　分科会
- マッドバスターズ分科会
- 移送分科会
- 心のケア分科会
- キッズ分科会
- 農業支援分科会 → 浜支援分科会
- 生活支援分科会
- 仮設サロン分科会
- 仮設サロン支援連絡会
- 在宅支援連絡会
- 牡鹿支援連絡会
- 連携調整事業
- 請負（ボランティア調整業務）
- 特殊車両活用事業
- 住環境改善事業（金華山）
- 「おらほの復興市」支援事業
- 仮設住宅支援事業
- 震災の語り部事業
- 緊急支援 和歌山

- 4月1日　市役所　「被災市民生活支援課」設置
- 4月1日　事務所を専修大学より移転
- 4月17日　東日本大震災復興促進特別委員会　開催
- 5月1日　石巻仮設住宅コールセンターオープン
- 5月6日　茨城県つくば市から常総市にかけて竜巻発生
- 5月6日　茨城県つくば市竜巻被害支援（6日～8日）
- 5月21日　全体会　第282回をもって終了
- 5月30日　石巻市立病院開成仮診療所　診療開始
- 5月31日　災害廃棄物処理業務等に関する調査特別委員会（百条委員会）設置
- 5月31日　NPOの皆様へ経緯説明会（p32参照）
- 6月4日　全体会　リニューアル
- 6月9日　石巻まちなか復興マルシェ　オープン
- 6月17日　雄勝　海鮮市ウニまつり
- 7月1日　仮設住宅対抗スポーツ大会
- 7月8日　平成24年度石巻市総合防災訓練
- 7月23日　第1回　復興みやぎネットワーク会議へ参加
- 7月31日　東日本大震災供養祭　流燈
- 8月1日　第89回石巻川開き祭り
- 8月5日　市民大座談会～プチ市民と共に復興する石巻～
- 8月26日　トリコローレ音楽祭・ボンバール石巻　同時開催
- 9月6日　北九州市へがれき搬出作業開始
- 9月26日　市議会定例会にて百条委員会の報告案と調査終了が議決
- 9月30日　石巻福祉まつり
- 10月6日　東北元気フェスティバル
- 10月20日　「アニぱら音楽館」EXTREME LIVE in 石巻
- 10月21日　いしのまき大漁まつり
- 10月27日　サンファン祭り（27日～28日）
- 11月10日　在宅被災者対象の支援物資配布会（10日～11日）
- 11月11日　おらほの復興市
- 11月17日　石ノ森萬画館　再オープン
- 11月18日　第50回　仮設サロン支援連絡会
- 11月22日　「みらいサポート石巻」へ名称変更

4月　5月　6月　7月　8月　9月　10月　11月

仮設サロン連絡会　いしのまき支援連絡会と改称し継続中

被災者支援の連携推進として継続中

地域づくりサポート事業として継続中

伝承・交流事業として継続中

緊急支援 茨城県つくば市

5. 登録団体一覧 【石巻災害復興支援協議会】登録団体一覧（50 音順） 2012 年 5 月 31 日現在

No.		団体名
1	任意団体	アースデイ東京タワーボランティアセンター
2	任意団体	アースデイジャパン　祭部
3	ＮＰＯ法人	アースデイマネー・アソシエーション
4	任意団体	ＲＱ市民災害救援センター
5	ＮＰＯ法人	あいうえお堺支部
6	任意団体	愛ちゃんぶる～
7	任意団体	IDROJapan
8	ＮＰＯ法人	あいの会
9	学校法人	愛和学園
10	株式会社	あおばや
11	任意団体	A～GAIN
12	任意団体	アジア子どもの夢
13	任意団体	アスイク
14	ＮＰＯ法人	アステオ
15	任意団体	阿部＆高橋(仮)
16	任意団体	アモール石巻（個人ボランティア集合体）
17	任意団体	AWA311-MCW
18	ＮＰＯ法人	生きる塾
19	任意団体	井口小児科内科医院
20	株式会社	石塚サン・トラベル
21	ＮＰＯ法人	いしのまき環境ネット
22	一般社団法人	石巻元気復興センター
23	任意団体	石巻コミュニティ放送（ラジオ石巻）
24	ＮＰＯ法人	石巻復興支援ネットワーク
25	任意団体	石巻市復興を考える市民の会
27	任意団体	石巻受験生応援塾
28	ＮＰＯ法人	石巻スポーツ振興サポートセンター
29	社団法人	石巻青年会議所
30	任意団体	石巻専修大学　山崎ゼミナール
26	任意団体	石巻専修大学同窓会
31	任意団体	石巻地区動物救護センター
32	任意団体	石巻ふるさと復興協議会
33	任意団体	石巻ボランティア支援ベース絆
34	任意団体	It's Not Just Mud(INJM)
35	ＮＰＯ法人	移動支援フォーラム
36	株式会社	伊藤ハムグループ被災地支援プロジェクト
37	任意団体	いのちのまつりプロジェクト
38	任意団体	いのちの輪　チームグランマ
39	ＮＰＯ法人	今治センター
40	株式会社	入れ歯クリーニングメリー
41	ＮＰＯ法人	Inseki　Project
42	任意団体	International Victims Assistance
43	ＮＰＯ法人	印旛たすけあいネット
44	任意団体	We are all One
45	任意団体	宇宙支援隊
46	社団法人	宇都宮青年会議所
47	ＮＰＯ法人	運転免許取得支援センター
48	株式会社	映広
49	任意団体	栄養ネットワーク
50	ＮＰＯ法人	ABCジャパン
51	一般社団法人	ap bank
52	ＮＰＯ法人	SSER(四国スポーツ環境リレーション)
53	任意団体	SCI-JAPAN
54	一般社団法人	エステティックグランプリ
55	任意団体	江戸川区訪問介護事業者連絡会
56	有限会社	エヌテック
57	ＮＰＯ法人	ＭＥＴ
58	任意団体	M.Snetかわせみ
59	任意団体	MKO
60	株式会社	OMT
61	任意団体	大垣市子ども会育成会
62	地方公共団体	大阪市環境局
63	社団法人	太田青年会議所
64	一般社団法人	OPEN JAPAN
65	有限会社	オサナイ工業
66	株式会社	オリックス
67	ＮＰＯ法人	オンザロード
68	任意団体	外大東北復興支援隊
69	ＮＰＯ法人	学生ビジニティいわて
70	株式会社	門倉組グループ
71	任意団体	かながわ東日本大震災ボランティアステーション
72	任意団体	カメパオプロジェクトチーム
73	宗教法人	Caritas Japan
74	任意団体	GARUDA
75	任意団体	環境と子どもを考える会
76	任意団体	寛恕
77	任意団体	関東東北大震災支援大阪鶴見ネットワーク(OTN)
78	株式会社	カンロ
79	ＮＰＯ法人	希少難病患者支援事務局
80	任意団体	築会
81	任意団体	希望のえんぴつプロジェクト
82	任意団体	キャンナス
83	ＮＰＯ法人	キャンパー
84	ＮＰＯ法人	九州ラーメン党
85	ＮＰＯ法人	教育支援ネットワーク未来
86	任意団体	基督兄弟団 石巻キリスト教会仙台教会
87	社団法人	桐生青年会議所
88	株式会社	近畿日本ツーリスト第２営業支店
89	有限会社	屈斜路ガイドステーションわっか
90	任意団体	熊本いいくに会
91	株式会社	グラクソ・スミスクライン
92	任意団体	CRASH JAPAN
93	任意団体	CLUB PACIFIC
94	ＮＰＯ法人	グリーンエネルギー研究会
95	ＮＰＯ法人	Greenheart
96	任意団体	グループ　ソバージュ
97	任意団体	ぐるぐる応援団
98	ＮＰＯ法人	ぐるっと
99	任意団体	グレースシティリリーフ
100	社団法人	黒磯青年会議所
101	任意団体	群馬県地域婦人団体連合会
102	株式会社	K.a.a.JAPAN
103	任意団体	元気に歌おう！プロジェクト
104	任意団体	元気村
105	任意団体	建人会
106	株式会社	コイケ
107	任意団体	神戸国際支援機構
108	任意団体	Go ahead！
109	ＮＰＯ法人	国際支援地球村
110	任意団体	国際武道大学ボランティア
111	ＮＰＯ法人	国際ボランティア学生協会(IVUSA)
112	任意団体	国士舘大学ボランティア
113	任意団体	心
114	ＮＰＯ法人	国境なき奉仕団チーム山形
115	ＮＰＯ法人	コドモ・ワカモノまちing
116	ＮＰＯ法人	子どもNPO・子ども劇場全国センター
117	ＮＰＯ法人	コモンビート
118	任意団体	ＮＰＯ 災害復興支援コーディネーター 蓮笑
119	任意団体	サイコロ山梨(臨床心理士)
120	任意団体	埼玉県倫理法人会石巻市災害VC隊
121	地方公共団体	佐伯市消防団(大分県)
122	株式会社	坂本興業
123	任意団体	さつま接骨院
124	任意団体	さぬき子供応援団
125	任意団体	澤田奉賛会
126	任意団体	C&N
127	任意団体	GND Fund(世界核兵器解体基金)
128	ＮＰＯ法人	CFFジャパン
129	株式会社	CO&MSK
130	ＮＰＯ法人	JEN
131	任意団体	塩尻おもちゃ図書館
132	株式会社	重光
133	任意団体	四万十塾
134	任意団体	清水ヶ丘接骨院
135	任意団体	市民ネットワーク　やっぺし！東北
136	任意団体	市民ネットワーク「山・海・川」
137	ＮＰＯ法人	ジャパンアウトドアメディカルサポート
138	ＮＰＯ法人	Japan Heart
139	ＮＰＯ法人	ジャパン・プラットフォーム(JPF)
140	任意団体	JAM
141	任意団体	昭和商店会災害ボランティア
142	任意団体	しょしがり秋田
143	有限会社	白石電設
144	有限会社	ジン工業
145	任意団体	震災救援マッサージボランティアはりきゅう便
146	公益財団法人	心塾
147	任意団体	身体哲学道場　湧氣塾
148	任意団体	スカラーシップ＆フレンドシッププラン
149	有限会社	杉本工務店
150	地方公共団体	逗子市教育委員会(社会教育課)
151	ＮＰＯ法人	Student Volunteer Army
152	任意団体	スペースプロ
153	ＮＰＯ法人	スマイルシード
154	ＮＰＯ法人	スマイルホープ
155	任意団体	生活協同組合あいコープ宮城石巻環境委員会
156	任意団体	生活協同組合あいコープみやぎ
157	ＮＰＯ法人	青少年育成支援ネットワーク「のびようネット」
158	任意団体	整体チーム
159	任意団体	青年海外協力隊OB
160	株式会社	西部リース
161	公益社団法人	セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン
162	株式会社	セーフティーアイランド
163	ＮＰＯ法人	世界快ネット
164	ＮＰＯ法人	セカンド・ハーベスト・ジャパン
165	株式会社	関根エンタープライズ
166	任意団体	セキュアベース四谷
167	任意団体	全国おもちゃ図書館連絡協議会
168	一般社団法人	全国心理技能振興会
169	任意団体	Sendai Tsunami Relief ORG
170	任意団体	Sendai Tsunami Relief Fund
171	ＮＰＯ法人	せんだい杜の子ども劇場

石巻災害復興支援協議会の事務局を訪問し、紹介用紙に記載いただいた内容を元に作成した登録団体のリストです。

No.	団体名
172	任意団体 仙遊寺
173	株式会社 大甲
174	株式会社 大正建機
175	任意団体 大正大学OB元重油災害ボランティア
176	株式会社 大森林
177	任意団体 大成建設株式会社ボランティア
178	株式会社 滝沢建設
179	任意団体 拓殖大学学生レスキューボランティア委員会
180	任意団体 拓殖大学ボランティアチーム
183	任意団体 WCRP(世界宗教者平和会議)
184	社会福祉法人 多摩市社会福祉協議会
185	ＮＰＯ法人 たんぽぽ
186	財団法人 たんぽぽの会
187	任意団体 地域の力
188	合同会社 チーター
189	任意団体 チーム王冠
190	任意団体 チーム鎌倉
191	任意団体 チーム京都
192	任意団体 チームジャパン300
193	任意団体 チーム零アクション
194	任意団体 Team チャーミ
195	任意団体 チームなかつがわ(中津川建設協会)
196	任意団体 チーム日光　(森と水の会を改名)
197	任意団体 チーム町田KIBOU
198	任意団体 チーム松本
199	任意団体 チーム山之石
200	任意団体 チーム結っこ”わくや”
201	任意団体 ちきゅうの子22
202	ＮＰＯ法人 地球平和のライトワーク
203	任意団体 千葉県私学退職教職員の会
204	株式会社 千葉工業
205	任意団体 チルドレン
206	任意団体 つなプロ
207	任意団体 鶴岡・月山元気村
208	任意団体 帝科大金華山支援プロジェクト
209	ＮＰＯ法人 ＤＲＴＪａｐａｎ
210	ＮＰＯ法人 DoTankみやぎ
211	任意団体 Texas Baptist Men
212	株式会社 デュナテークス
213	株式会社 藤久建設
214	公益財団法人 東京YMCA
215	社団法人 東京青年会議所
216	宗教法人 東京パブテスト教会
217	株式会社 東光送電工事㈱
218	任意団体 東北救済プロジェクト
219	株式会社 東北復興バトンリレー
220	一般財団法人 東北ヘルプ
221	宗教法人 徳恩寺
222	株式会社 都市管理サービス
223	ＮＰＯ法人 とちぎボランティアネットワーク
224	任意団体 富山国際大学チーム
225	任意団体 ドルフィンドリーム
226	任意団体 長岡技術大ボルナツ
227	任意団体 中津川市防災市民会議
228	医療法人 なごやか会(なごや耳鼻咽喉科)
229	任意団体 ナチュラル
230	任意団体 NADIA(ナディア)
231	ＮＰＯ法人 難民を助ける会(AAR)
232	任意団体 にじいろクレヨン(石巻こども避難所クラブ)
233	任意団体 日本イラク医療支援ネットワークJIM-NET
234	公益財団法人 日本医療社会福祉協会
235	一般社団法人 日本カーシェアリング協会
236	一般社団法人 日本家政学会
237	任意団体 日本警察消防スポーツ連盟
238	一般財団法人 日本国際飢餓対策機構
239	公益社団法人 日本国際民間協力会(NICCO)
240	公益財団法人 日本財団
241	任意団体 日本障害フォーラム(JDF)
242	ＮＰＯ法人 日本ストレッチング協会
243	社団法人 日本スポーツチャンバラ協会
244	株式会社 日本糖尿食研
245	ＮＰＯ法人 日本トラベルヘルパー協会
246	任意団体 日本プライマリケア連合学会(PCAT)
247	任意団体 庭JAPAN
248	任意団体 Next Generation Ability (NGA)
249	任意団体 野口工務店安全衛生協力会
250	ＮＰＯ法人 ハーティ
251	ＮＰＯ法人 パスの会
252	有限会社 Patagonia
253	任意団体 Pax
254	ＮＰＯ法人 ハビタット・フォー・ヒューマニティ・ジャッパン
255	ＮＰＯ法人 パブリックリソースセンター
256	任意団体 パルシステム
257	任意団体 パルシステム生活協同組合連合会
258	ＮＰＯ法人 パルシック
259	ＮＰＯ法人 ハンガープロジェクト協会
260	有限会社 パンドミー
261	一般社団法人 ピースボート災害ボランティアセンター
262	任意団体 ピースボート内弁護士グループ
263	任意団体 ビーワン東北エイド
264	任意団体 東日本大震災支援全国ネットワーク(ＪＣＮ)
265	宗教法人 被災者支援センターエマオ石巻
266	任意団体 被災地障がい者センターみやぎ
267	任意団体 被災地へ
268	株式会社 日立国際電気
269	有限会社 ひふみ林業
270	社団法人 姫路青年会議所
271	任意団体 ヒューマニティファースト
272	任意団体 ヒューマンシールド神戸
273	ＮＰＯ法人 ヒューマンフェローシップジョブキャンプ
274	任意団体 兵庫っぺ絆
275	社団法人 平塚青年会議所
276	株式会社 フィールドグループ義援隊(フィールドプロ)
277	任意団体 face to face　東日本大震災リハネットワーク
278	任意団体 福野山岳会
279	株式会社 福山産業
280	株式会社 富士電工
281	ＮＰＯ法人 フラワーピープル
282	任意団体 フリー
283	任意団体 プリック
284	任意団体 ブルーメンの紙しばい隊
285	任意団体 プロジェクト結コンソーシアム
286	株式会社 プロレスリング・ノア
287	任意団体 Very50
288	任意団体 ヘルプ東北(Help Tohoku)
289	公益財団法人 ボーイスカウト日本連盟
290	任意団体 ボーイスカウトOKD
291	ＮＰＯ法人 ホップ障害者　地域生活支援センター
292	ＮＰＯ法人 ポポロ
293	任意団体 ボランティアセンター救援チーム(仮)
294	ＮＰＯ法人 まきばフリースクール
295	任意団体 まごのて　ネットワーク
296	任意団体 マザーリンク・ジャパン
297	任意団体 松山大街道商店街振興組合
298	ＮＰＯ法人 マリンサポート青年東北支援隊
299	株式会社 マルソグループ
300	有限会社 御笠環境サービス
301	任意団体 みちのく復興の会
302	株式会社 三井住友銀行
303	任意団体 みなかみレスキュー&サポートチーム
304	任意団体 ミニサーカス隊・キャラバン
305	任意団体 MIHO☆JFH
306	任意団体 宮城県地球温暖化防止運動ネットワーク
307	任意団体 みやぎ支援センター
308	任意団体 みやぎ生協石巻ボランティアセンター
309	任意団体 都旬膳　月の舟
310	任意団体 Music Shop
311	任意団体 魅来 ‘笑顔届け隊’
312	任意団体 未来日本
313	任意団体 未来の命を守ろう会
314	任意団体 未来ビレッジJAPAN
315	任意団体 ミラクルハンズ
316	ＮＰＯ法人 め組JAPAN(MAKE　THE　HEAVEN)
317	任意団体 meguri 311
318	任意団体 杜の都異業種交流会
319	任意団体 森の楽園
320	社団法人 八千代青年会議所
321	任意団体 八ヶ岳ピースワーカーズ
322	任意団体 山都百二姓
323	ＮＰＯ法人 ゆいめど
324	任意団体 U-ネット
325	任意団体 ユキオちゃん
326	社会福祉法人 夢みの里
327	任意団体 横浜市青葉区商店街連合会
328	社団法人 ラーメン協会
329	任意団体 ライオンズクラブ
330	任意団体 ライオン
331	任意団体 Love-Gathering
332	ＮＰＯ法人 ラブネイバーズ
333	ＮＰＯ法人 らぽおる
334	社会福祉法人 らぽおるの樹
335	任意団体 リカバリーフォージャパン
336	株式会社 リフォーム産業新聞社
337	ＮＰＯ法人 凌心
338	宗教法人 JLERルーテル教会救援ルーテルとなびと支援センター
339	任意団体 レラ
340	任意団体 ROCK´N´ROLL FESTIVAL実行委員会
341	任意団体 ＹＡＳ.(ワイス)
342	有限会社 ワコーエコテック
343	社会福祉法人 わたぼうしの会
344	株式会社 協和エクシオ東北支店

※2016年１月現在、登録時の住所が不完全であったり、宛先不明により返送されたりし、郵送による連絡のとれない団体が約132あります。2015年までに活動を休止された団体も多くいらっしゃるかと思いますが、本リストは登録時の情報のみを掲載しております。

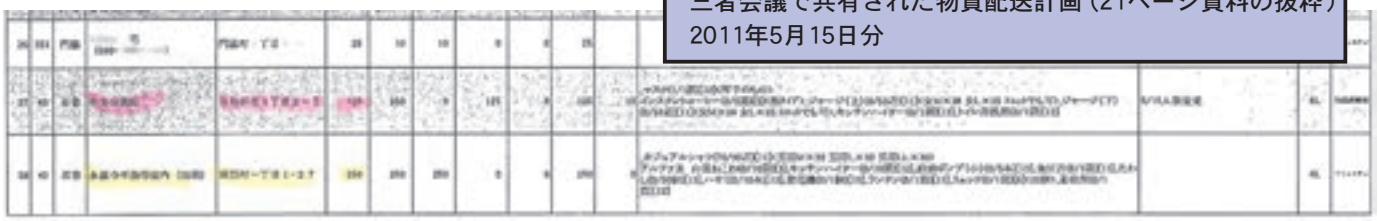
震災直後に石巻に駆け付け登録くださった団体の半数以上が任意団体であり、また、石巻災害復興支援協議会への登録はされなくとも活躍された方々は数多くいらっしゃいました。過去の災害においても、法人格の有無を問わず、有志による集まりが初動時に大きな貢献を果たされており、その善意に改めて感謝申し上げます。

6. 東日本大震災から5年間のNPO連携

6-1. 緊急期～１年目の物資支援方針の共有

大規模災害において物資配布は被災者支援の重要な役割を果たし、同時に、その「終了時」「終了の仕方」が問題となります。石巻に現地事務所を置き、緊急期から避難所、仮設住宅への移行と共に歩み続けてきた団体が、「地元商店の営業再開」「コミュニティを通じた物資管理」「自治会長、町内会長等の負担」「依存の弊害」に直面する中で、行政や他団体、地域の方々と情報を共有し、できるだけ物資配布に頼らない活動を選択し続けてきた事実が今後の参考になれば幸いです。

三者会議で共有された物資配送計画（21ページ資料の抜粋）
2011年5月15日分



2011年4月4日　三者会議により行政による物資配送契約共有開始（上表）
（在宅被災者に対しても20世帯以上のコミュニティには行政が物資配布）
2011年5月3日　物資配布・ローラー分科会　解散
2011年11月　県の19万箱の支援物資在庫（右表）を共有しながらも
仮設サロン支援連絡会にて「仮設住宅における物資配布は控える」と合意
2012年11月　石巻市が在宅被災者向けに物資配布会

宮城県保管の支援物資
2011年11月1日現在
約19万「箱」

6-2. １年目の IDRAC の反省点

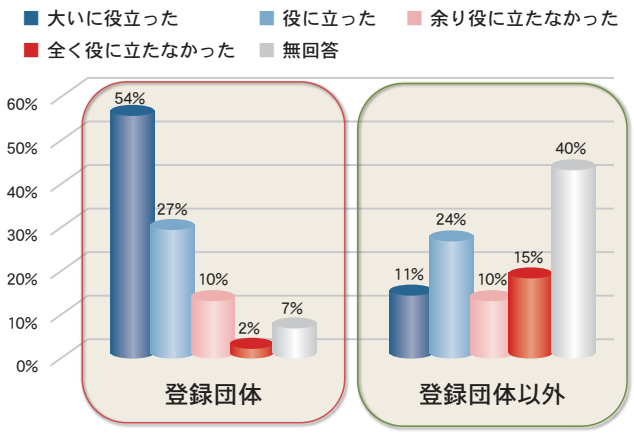
本冊子の前半では、2011年のNPO連携の成果を記載してきましたが、良い面以外にマイナスの面も、もちろんありました。2012年3月に実施した石巻の支援団体調査において「石巻災害復興支援協議会が役に立ちましたか？」との質問に、右の回答を得ています。

IDRACに登録していない団体も数多くあり、登録団体の回答と比較して、明らかに「役に立っていない」「無回答」の比率が高く、あれだけの広域災害では、一つの中間支援団体だけでは活動団体をカバーしきれていないことは、１年後に明確になっていました。

ただ、当会を訪問し、団体紹介シートを提出して「登録団体」になっているにも関わらず「まったく役に立っていない」、「存在そのものを知りませんでした」と回答されている団体があり、おそらく別スタッフが担当されたものと考えられますが、同一団体内でも本部と現場で情報共有することが難しいほど、震災直後には混乱が生じていたこともわかりました。

IDRACが「ボランティアやNPOをとりまとめていた」等の紹介をいただくことがありましたが、連携を希望する団体に対して、人材、時間等の制約の中で情報共有の場を提供することだけで精一杯でした。

石巻災害復興支援協議会の評価



登録団体：
296団体に送付し、114団体より回答

登録団体以外：
赤い羽根共同募金支援金の助成を受けて活動していた登録団体以外の190団体に送付し、96団体より回答

ＮＰＯ等による震災復興支援活動に関する調査
（せんだい・みやぎNPOセンター実施）にあわせた
石巻災害復興支援協議会補足調査より（2012年3月）

6-3. ２年目以降のNPOの活動人数

2015年8月現在で「いしのまき支援連絡会」に登録し、かつ、石巻市に事務所を設置していた26団体のNPOに対して2012年度以降の活動人数のヒアリングを行い、活動実績が確実な最低レベルの人数を問い合わせた結果、全団体から回答を得ることが出来ました。その推移を集計したところ、以下の傾向が明らかとなりました。（右グラフ参照）

①2012年に、活動人数が大きく減少
②2012～2015年度にかけて、段階的に減少
③2012年には、ＮＰＯが年間延べ7万人活動
④2015年度も、延べ3万人以上の活動が見込み

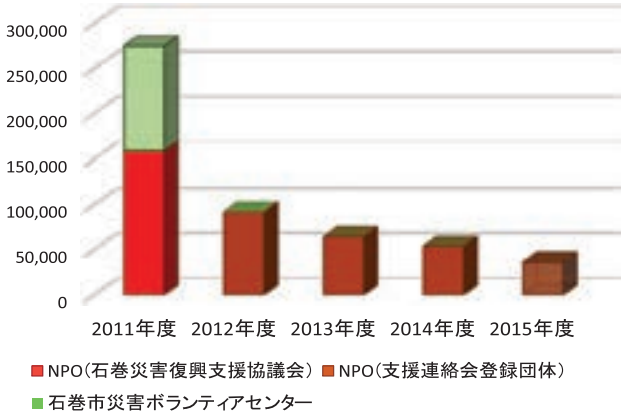
①、②および④の３点は、震災から年月を経るにつれて、被災地で必要とされる活動が限定され、また、寄付金等の活動資金も減少することから当然でもありますが、5年目においても万人単位の活動見込みを含むNPOの活動規模を改めて数値化することができました。

③について、2011年度と2012年度ではNPO活動人数の算出根拠が多少異なる（※）ため、この二つの数値で比較する意義は大きくないものの、石巻市災害ＶＣを通じた2012年度の活動は600人弱（前年と比較して0.5%程度）に激減したことと比較し、NPOは、連絡会の登録団体だけでも8.7万人規模の活動を維持しており、仮設住宅等のコミュニティ支援のフェーズにおいてNPOに果たせる役割が明確になりました。

石巻市災害ＶＣの活動人数は減少したものの、災害ＶＣを運営する石巻市社協は、緊急雇用創出事業を活用して仮設住宅の見守り等の事業により毎年、最大160名規模の生活再建支援員を配置しています。年度ごとに減少するNPOの人数と比べ、生活再建支援員の人数は安定して推移しています。（右下グラフ）

仮設入居時に大規模なコミュニティ支援を実施したNPOと、地元の社協との間で、勉強会や情報共有が可能な体制を6年目に至るまで維持されてきたことにより、緊急期後の地域福祉活動を見据えて、社協が、災害ＶＣの設置・運営をNPOと連携して行う意義が改めて確認できました。

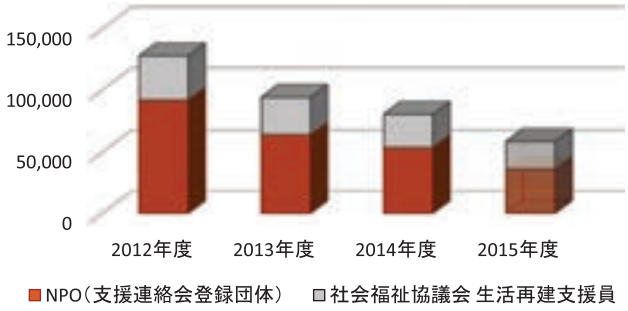
ボランティア、NPOの活動人数推移



NPOの活動人数推移（2012年度以降）

		2012年度	2013年度	2014年度	2015年度
1	石巻医療圏健康・生活復興協議会	7,500	3,840	2,880	0
2	石巻仮設住宅自治連合推進会	1,195	1,540	2,300	2,460
3	石巻スポーツ振興サポートセンター	1,380	1,220	1,560	320
4	石巻復興支援ネットワーク	5,540	5,640	5,440	4,810
5	移動支援レラ	2,677	2,828	3,154	2,880
6	うめばたけ	181	482	518	169
7	エマオ石巻	1,730	1,741	1,436	659
8	オープンジャパン	5,435	1,643	753	565
9	お茶っこケア	288	806	1,099	390
10	オンザロード	1,694	522	120	140
11	カリタス石巻ベース	2,063	2,066	2,044	2,000
12	キャンナス東北	5,095	3,097	2,802	2,136
13	こども∞感ぱにー	180	1,178	938	1,154
14	JEN	7,981	6,759	4,172	1,560
15	チームわたほい	559	671	289	213
16	TEDIC	202	653	586	790
17	DoTank みやぎ	3,780	3,780	840	720
18	日本医療社会福祉協会	1,118	686	805	656
19	日本カーシェアリング協会	2,215	2,095	1,975	1,815
20	BIGUP石巻	2,625	2,750	2,375	1,000
21	ピースボート災害ボランティアセンター	17,678	7,340	5,835	3,682
22	ヒューマンフェローシップ	3,818	4,208	3,871	1,364
23	プロジェクト結	8,400	5,425	5,085	4,160
24	みらいサポート石巻	1,606	2,293	2,257	2,060
25	め組　ジャパン	6,608	1,056	712	420
26	ルーテル教会救援	154	43	0	0
合　計		91,702	64,362	53,846	36,123

NPOと生活再建支援員の活動人数推移



※2011年度と2012年度以降のNPO活動人数根拠の差異

以下2点が異なります。
・2011年度と2012年度で、情報共有元の団体に多少差異がある。
・2011年度はNPOの有給スタッフの扱いを各NPOの判断に任せていたが、2012年度以降は、有給・常勤スタッフを含めることで統一している。
なお、2015年度は、ヒアリング時点（2015年8月）での常勤スタッフの年度末までの雇用予定を含めた予測人数を記載しています。

6-4.　NPO連絡会の変遷

石巻市においては、東日本大震災直後からNPOの連絡会が実施されており、中でも、2011年8月に始まった「石巻仮設サロン支援連絡会」(計59回)は、2013年度に「石巻仮設支援連絡会」(計11回)、2014年度に「いしのまき支援連絡会」(2015年8月現在で計16回、継続中)と名称を変更しながらも、震災5年後においても毎月開催されてきました。(巻末資料参照)

石巻仮設サロン支援連絡会

2011年8月～2013年3月	主催:石巻災害復興支援協議会(みらいサポート石巻)

↓

石巻仮設支援連絡会

2013年4月～2014年3月	主催:幹事会(石巻社協、みらいサポート石巻を含む)

↓

いしのまき支援連絡会

2014年4月～2016年継続中	主体:石巻市社会福祉協議会　運営:幹事会

当初、仮設住宅への訪問支援を実施する社会福祉協議会に対し、NPOは集会所や談話室においてサロン活動を行う、という役割分担から「仮設サロン支援連絡会」と命名されましたが、連絡会におけるテーマがサロン活動や、仮設住宅に限定しなくなってきたことから、参加団体の話し合いとワークショップにより、名称を変更してきました。

同時に、主催団体にも変化があり、2011年は石巻災害復興支援協議会／みらいサポート石巻が主催し、事務局を担っていましたが、連絡会の合間に、石巻市社会福祉協議会と毎月幹事会を開催するようになり、他団体の参画を得て石巻市社会福祉協議会を主体として幹事会が運営する形となりました。震災から５年を経て、議事進行、議題案や議事録作成、メーリングリストに至るまで少しずつ移行し、石巻市社会福祉協議会を中心とした体制に引き継がれました。

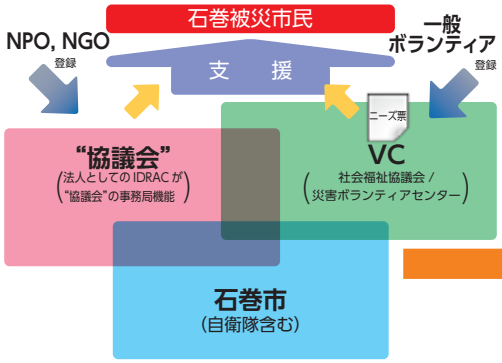
6-5.　災害時におけるNPOの「登録」から集中復興期間後の連携へ

東日本大震災後に見直された石巻市地域防災計画においても、NPOに関しては「行政機関、石巻市社会福祉協議会、NPO及びボランティア団体等とのネットワークを構築する」とだけしか記述されていませんが、災害ＶＣに対して被災者との「マッチング」を求める団体だけでなく、東日本大震災後の石巻では、独自のミッション・予算やスタッフのマネジメント能力を有し、ニーズ票との「マッチング」を必要としなかったNPOが大規模に活躍していました。行政、社会福祉協議会等、どの機関がNPOとの情報共有やネットワーク形成を担うにしろ、NPO活動の主体性、機動力等の長所を損なわない形での体制構築が望まれます。

石巻災害復興支援協議会の「登録団体」は344団体を数えましたが、災害ボランティアセンターに「登録」することで、本来は存在しない上下関係や「傘下に入る」ことに対するNPO側の懸念を軽減するため、その登録用紙は「ボランティア内容紹介用紙(団体用)」という名称で「自分の団体としてこういう内容の活動に取り組む」と紹介する形式をとりました。その後の情報共有や連携への参画方針は、各団体の自主性に任せており、2016年現在でも「いしのまき支援連絡会」の登録には、「登録団体紹介シート」として、NPOにとって記入および提出しやすい形としています。(巻末資料参照)

また、震災前から、石巻市NPO支援オフィスには 75 団体が登録されていましたが、2016年3月現在は123団体に増加しており、震災直後に生活支援を行うNPOだけでなく、元々地元で活動する団体もあわせて行政とも情報共有する場が必要となってきました。いしのまきNPOセンターの主導により2015年10月に第1回、2016年3月に第2回の「石巻市NPO連絡会議」が開催され、生活支援分野にとどまらないNPOと行政の連携の場が生まれつつあります。

6-6. ６年目を迎えて　～私たちの変化～



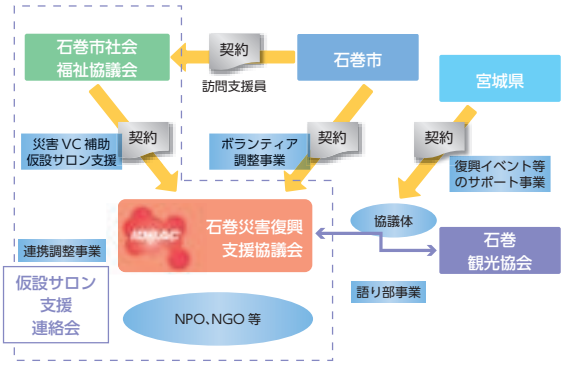
≪ＩＤＲＡＣ設立≫

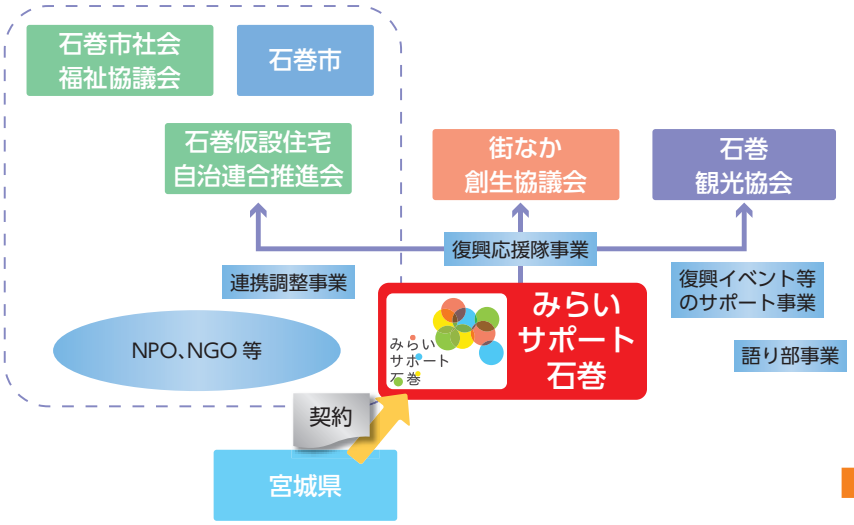
2011 年 5 月 13 日　一般社団法人 石巻災害復興支援協議会を設立。海外からの助成金や 8 月に行政からの雇用創出事業を受託し、無償ボランティアの業務を地元スタッフを雇用して引き継げるようになり、被災地発の非営利法人として自立を開始。

≪１年後≫

石巻市・社協・石巻災害復興支援協議会の3者が契約関係に。

宮城県「新しい公共」事業受託で石巻観光協会との協議体により復興イベント等のサポート事業や、「語り部」事業など、連携調整にとどまらない前向きな活動が開始。





≪２～４年後≫

2012年11月22日に団体名を「みらいサポート石巻」に改称。2012年12月に宮城県より「復興応援隊」事業を受託し、石巻の未来を担う3分野の組織やリーダーをサポートしながら「住民主体の街づくりサポート」「情報発信による地域間の交流の促進」「仮設住宅自治連合会等や地域団体の活動支援」を実施。

≪５年後≫

2015年7月1日に宮城県の公益認定を受け「公益社団法人みらいサポート石巻」に。

市民主体の震災伝承活動を活動の柱とし、2020年度に設置予定の石巻市南浜津波復興祈念公園を視野に入れ、「つなぐ未来の石巻へ」をミッションとして、公益性を高めて活動を継続。

〈コラム②：石巻市の連絡会開催団体からの寄稿〉

社会福祉法人石巻市社会福祉協議会
復興支援課　主幹　平塚信一朗

東日本大震災後、我々石巻市民はＮＰＯに対する認識・見方が大きく変化したと思います。関係者しか分からなかったＮＰＯが、復興支援・地域支援を担い、市民を支援する団体であると広く知られるようになったのは、震災後のＮＰＯの皆さんの活動・活躍があったからだと思います。

災害ボランティアセンターのパートナーであったＮＰＯの皆さまが、石巻市の復興状況の変化に併せて取り組まれているそれぞれの活動を、情報共有の場「いしのまき支援連絡会」にて確認させていただいております。

今後のＮＰＯの皆様の活動については、地域との融和を考え、地域住民と協力し合える関係性を構築いただければと思います。地域との関係性があれば、活動の着地点を調整されている団体を地域に繋ぐこともできますし、継続的に活動する団体にとっては住民の理解と協力が大きな味方となると思います。

NPO 法人いしのまき NPO センター
副代表理事　木村　正樹

東日本大震災において、大きな被害を被った石巻市には、震災直後から多くのＮＰＯ・ボランティアの方々が救援活動に来ていただきました。

石巻市は、従前より市民活動が活発な地域であり、震災前から環境・福祉・教育・まちづくり等のさまざまな場面で活躍してきました。今回の震災においても地元の団体として被災者支援活動に取組まれた団体も多く、また、震災を契機に団体を立上げ、被災者支援に取組み始めた団体も多くありました。

今般、震災から５年を迎える時期に、石巻市内で活動しているＮＰＯ・ボランティア団体の方々に声掛けをさせていただき「石巻市ＮＰＯ連絡会議」を発足しました。この連絡会議が、市外から来ている団体や市内で従前より活動している団体間の垣根を取り払い、市内全域のＮＰＯ間の情報共有や官民連携の場となり、震災から６年目以降の石巻市の復興活動に貢献できることを目指していきます。

震災支援の連携から、震災伝承の連携へ

みらいサポート石巻は、発足当初から震災支援に集う NPO の情報共有の場づくりに取り組んできましたが、「いしのまき支援連絡会」が社協主体に移行したほか、「石巻市ＮＰＯ連絡会」がスタートし、事業面でも石巻仮設住宅自治連合推進会の運営が軌道にのるなど、地域への移管が進んできました。

一方、石巻圏において、震災を伝える取り組みが自然発生的に各所で始まったことから、語り部連携検討会、震災学習コンファレンス等を開催し、その協働体制づくりに努めています。

7. 事業報告、決算報告

1. 事業報告(公益目的事業)
   1　被災者支援連携推進
   2　宮城県における防災教育
   3　伝承・交流事業
   4　安心安全のまちづくり
   5　地域づくりサポート事業

2. 事業報告(収益事業)
   1　ＩＴ事業

3. 決算報告
   1　経常収益
   2　経常支出

“みらいサポート石巻の発行物”

7-1. 公益目的事業

1. 被災者支援の連携推進（2011 年 5 月～継続中）

○全体会

2011年3月20日の第1回「NPO・NGO連絡会」発足より2012年5月までに、石巻に災害支援活動に集まった団体が情報を共有するための連絡調整会議（以下、全体会）を、通算282回（法人化後は231回）実施しました。

また、全体会にて報告される各団体の活動内容を記録・集計することで、石巻で展開されたＮＰＯの活動内容を面的に把握。

石巻専修大学に集まるボランティアが活動場所まで移動するためのバス2台（各35日、55日間）の運行費用を支援したり、行政や災害ボランティアセンター、各機関との連携調整を行いました。

災害対策本部で用意されたプレート

○行政機関等との調整

石巻市の災害対策本部にオブザーバーとして参加し、ＮＰＯの支援活動について報告を行ったほか、市役所・自衛隊との三者会議に出席し、炊き出しや物資配布について情報を交換しました。

また、仙台で開催された復興庁、宮城県庁、宮城県社会福祉協議会、NPO 関係者が参加する被災者支援連絡調整会議等にも参加し、行政機関や社会福祉協議会と密な調整を行いながら活動しました。

○炊き出し・イベント調整

炊き出し支援を実施する団体等からの申し出を受け付け、各地の避難所等で重複しないように提供先の紹介を行い、2011 年 3 月の調整開始より 10 月 11 日までに通算 878,000 食（5 月 13 日の法人化からは 381,000 食）の炊き出し調整を行いました。

また、炊き出しの他にも、各種支援提供の相談窓口となり、県内外のボランティア団体や企業から提案のあった支援イベント等の受け入れを調整しました。

炊き出し場所をマッピング

連絡会の開催

○ボランティア調整業務

震災直後は無償ボランティアが担っていた調整業務について、2011 年 8 月に石巻市から緊急雇用創出事業を請け負ったことで、連絡調整の事務局を継承しました。被災地石巻における求職者 17 名を新規雇用し、石巻の住民が主体となって記録を残しながら業務を行いました。

また、2011 年 4 月 11 日にウェブサイトを開設し（独立行政法人防災科学技術研究所より提供されたｅコミュニティ・プラットフォームを活用）、テントサイトの運営ルールや、全体会の議事録などの支援情報をはじめとして様々な情報を発信したほか、助成金申請に関する相談や備品の貸出等、石巻で活動するボランティア・団体をサポートしました。

○避難所生活環境改善（2011年5月～2011年9月）

石巻市の避難所50か所、のべ4,282人を対象に、寝具の廃棄（6,389枚）、乾燥（5,881枚）、毛布配布（4,247枚）、防虫対策、清掃などの衛生改善活動を実施しました。

※キャンナス、日本イラク医療支援ネットワーク（JIM-NET）、日本プライマリ・ケア連合学会（PCAT）、ピースボート災害ボランティアセンター、め組JAPAN、石巻災害復興支援協議会の6団体のスタッフやボランティアが、団体の枠を超えて連携した一つのチーム「ダニバースターズ」として活動しました。

3トントラックを改造した寝具乾燥車

海岸で　散乱した丸太を運搬する特殊車両

○車両活用・住環境緊急改善（2011年5月～2012年3月）

ダイムラーＡＧより日本財団に寄贈された特殊車両（ゼトロス3台とウニモグ1台）を運用するための受け皿となり、NPO等が実施する瓦礫撤去等の活動現場に車両を派遣する業務を行いました。また、日本財団より借り受けたダンプ5台、トラック1台の貸し出し業務や修繕費・燃料費の一部負担も行い、震災後の復旧活動と住環境改善に貢献しました。

○入浴支援（2011年8月～2011年10月）

自衛隊の入浴支援終了後、石巻市からの委託契約を受けて、石巻市中央町と不動町の2か所に仮設浴場を設置しました。運営は（一社）ピースボート災害ボランティアセンターの協力を得て、多い日にはそれぞれ100名以上の利用者を受け入れました。事業期間を通しのべ11,500人に入浴機会を提供し、避難所の閉鎖のタイミングに合わせ、10月11日に終了しました。

入浴によりくつろぐ避難者

○仮設サロン支援連絡会～いしのまき支援連絡会

ＮＰＯと共に実施した被災者支援連携活動の中で唯一、震災から5年を経た2016年度も連携を継続しています。

仮設住宅の入居者に対する支援が本格化した2011年8月に「石巻仮設サロン支援連絡会」を立ち上げ、59回開催されました。2013年に「石巻仮設支援連絡会」、2014年に「いしのまき支援連絡会」と改称しながら、石巻市社会福祉協議会とＮＰＯが情報交換・連携する仕組みを変化させてきました。（P.29参照）

2. 宮城県における防災教育（2015年1月～継続中）

国立研究開発法人防災科学技術研究所、一般社団法人みやぎ福祉・防災情報化機構と連携し、小学校における防災教育を開始しました。2014年度末に七ヶ浜町での防災マップ作りのサポートを始め、2015年度には石巻市の3つの小学校において、まちあるきや防災マップづくりを支援し、eコミュニティ・プラットフォームを利活用した防災マップづくりワークショップを実施するための防災教育カリキュラムの作成業務を行いました。

小学校での防災マップづくり

3. 伝承・交流事業

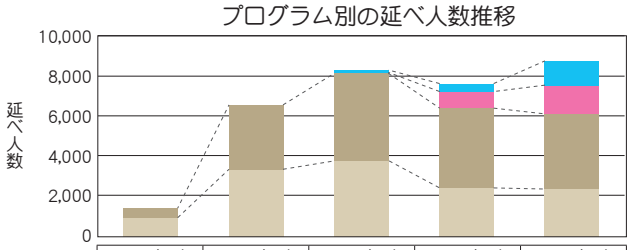
■ 震災伝承・防災プログラム

「震災の語り部」は、東日本大震災を千年先にも語り継ぎたいという強い想いで始まりました。
当初は、地震とそれに伴う津波で壊滅的な状況のなか、駆け付けて下さったボランティアに対し、せめてもの御礼の気持ちで地元スタッフが自身の体験を伝えていました。その後、多くの皆様からご希望をいただき、一般の方々にも聞いていただける体制を作り、現在は5つのプログラムを行っています。

＜震災伝承・防災プログラムの変遷＞
- 2011年09月：①「震災の語り部」がスタート
- 2011年11月：②「車中案内」がスタート
- 2013年10月：『「語り部」証言17題 3.11のこと』を出版
- 2013年11月：③「語り部と歩く3.11」がスタート
- 2014年03月：④「防災まちあるき」がスタート
- 2014年06月：⑤「出張語り部」がスタート

石巻津波伝承ARアプリ(※)を使った「防災まちあるき」や学校向けの「語り部と歩く3.11」により、風化が懸念される中でも、参加人数、件数ともに増加しました。(※P34参照)
また、小・中・高校生の受入も年々増えています。

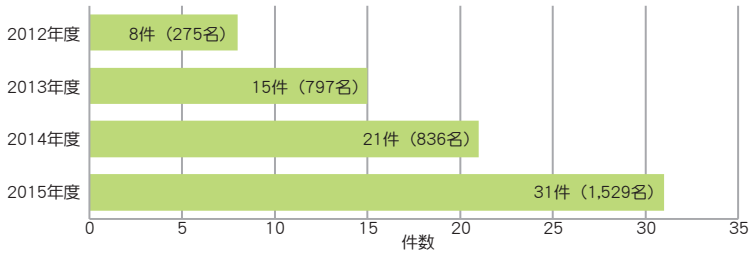
プログラム別の延べ人数推移



	2011年度	2012年度	2013年度	2014年度	2015年度
③語り部と歩く3.11	0	0	120	401	1,218
④防災まちあるき	0	0	48	832	1,443
②車中案内	480	3,230	4,393	4,002	3,769
①震災の語り部	959	3,387	3,808	2,452	2,396
延べ人数	1,439	6,617	8,369	7,687	8,826
実人数	994	3,996	4,925	4,851	6,491

※「延べ人数」は複数のプログラム申込者を重複カウント。「実人数」は重複カウントなし。

小中高校生の受入件数と人数の推移



■ 震災伝承スペース「南浜つなぐ館」「つなぐ館」

〈南浜つなぐ館〉

2015年11月、津波により約1800世帯の住宅街が流出してしまった南浜・門脇エリアに開館。館内には、街の再現模型や、震災直後の写真や資料、復興祈念公園(2020年度完成予定)の計画等を展示しています。また、毎月第２土曜日の午後、公開にて「語り部の会」を開催。館の周辺では、復興住宅の建設の進捗や、祈念公園の試験植栽地も確認することができます。

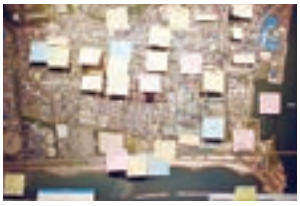
〈つなぐ館〉

東日本大震災の記憶を後世へとつなぐ、情報ステーションとして2014年3月に開館。2015年4月に移転し「奪い去られたもの・失うまいとしたもの」と題したコンセプト展示を中心に、中心市街地の模型や地元メディア、ボランティアの活動記録などを紹介しています。また、「震災の語り部」や「防災まちあるき」の拠点としても活用しています。

《「南浜つなぐ館」プロジェクト》

①あの時プロジェクト
『避難の必要性の伝承』
3.11の詳細な避難行動を位置情報と共に丁寧に聞き取り、震災の教訓として伝承。

②つなぐ記憶プロジェクト
『「街の記憶」の可視化』
震災前の街への想いや暮らしの記憶を記録し、祈念公園につながる「街の記憶」として可視化。



4. 安全・安心のまちづくり

石巻の中心市街地では、平成25年3月にコンパクトシティいしのまき・街なか創生協議会が「街なか復興ビジョン」を発表し、その3つの基本方針の一番目として「誰もが助かる安全安心な川湊石巻」が掲げられました。ビジョンの実現に向け、「一人一人がつくる安全・安心のまちづくり」プロジェクトが提案されたことから、コンパクトシティいしのまき・街なか創生協議会と協働で、地域の取り組みを実施してきました。

2013年10月からの1年半、復興庁の「新しい東北」先導モデル事業として、東北大学災害科学国際研究所、人と防災未来センター、名古屋大学等の専門家の協力を得て、大震災の被害状況や経験を可視化し、教育として3.11を伝えつなぐ震災学習プログラムの開発や、地域防災力の向上を推進してきました。

■ ICT（情報通信技術）システムを使った防災教育と賑わい創出

「石巻津波伝承ARアプリ」開発・公開と「防災まちあるき」プログラム化

AR(Augmented Reality=拡張現実)技術を活用し、東日本大震災の津波浸水深、震災前・震災後の写真、未来のイメージ画像を現在の状況と比較して見ることができるアプリを開発・無償公開し、Android版・iOS版の合計ダウンロード数は5,700件を超えました。(2016年3月23日時点)また、利用者アンケートにより全回答者から肯定的評価を得るなど、震災学習ツールとしての有効性を確認することができたとともに、総務省の「地方創生に資する地域情報化大賞 特別賞」を受賞しました。

↑東日本大震災時の津波浸水実績

Available on the App Store

ANDROID APP ON Google play

マップ上のアイコンをクリックすると、その地点の「過去～現在～未来」の写真を見ることができます。

過　去　　現　在　　未　来

■ 事業主・地域住民の災害対応力強化（住民、事業主との協働）

防災無線や住民の防災意識調査、避難訓練、勉強会・ワークショップ等の実施

地域住民や事業主の東日本大震災時の行動や経験、現状の備えの状況や防災無線の聞こえ方に関するアンケート調査を実施し、その結果を受け、地域でゆるやかに防災について考える「防災お茶っこ」や避難経路を確認・検討するワークショップなどを行いました。

また、地元の料理店組合と協働し夜間の避難訓練を実施したほか、飲食店の防災に関する冊子『料理店の震災談義』を制作しました。さらに、来街者が多い地域特性から、ウェアラブルカメラを用いた来街者の避難誘導調査なども行い、大震災の経験と教訓を活かしながら、地域の住民や事業主が主体的に考え、防災・減災の取り組みを継続するための場づくりを行いました。

5. 地域づくりサポート事業

■ 復興イベント開催支援・復興ツアー調整(2011年12月～2013年3月)

「宮城県新しい公共の場づくりのためのモデル事業」として、石巻観光協会や宮城県東部地方地域振興事務所、石巻市商工観光課等の参加を得て「復興市を創る会」を立ち上げ、ふれあい朝市の運営補助、地域行事や復興イベントの開催を支援しました。また、中心市街地の飲食店が連携して行うイベント「飲むっちゃ喰うっちゃスタンプラリー」の事務局業務や「街なかＭＡＰ」の作成も実施。

泥かきなどのボランティア活動へのニーズが終息する中で、引き続き圏外の方々にも復興や地域づくりに関わってもらうための仕組みづくりに取り組み、観光協会やまちづくり団体との連携が生まれました。

■ 住民主導による地域コミュニティの活性化と市街地のまちなか再生(2012年12月～継続中)

宮城県より石巻市中央地区復興応援隊事業の委託を受け、石巻仮設住宅自治連合推進会の支援を行った他、2015年からは【情報発信】【震災伝承・防災】【まちづくり】を柱に、住民主導による地域の取り組みをサポートする活動を行いました。

●情報発信

石巻観光協会を中心とした地域間交流を促進するため、ウェブサイトのリニューアルや、二市一町の周遊協議会とビジターズ産業ネットワーク等の事業推進支援を行いました。

観光協会ウェブサイトのページビュー数が2012年度から2015年度に9.4倍に増加し、観光協会からも職員のスキル向上につながったとの評価を得られました。

●震災伝承・防災

市民が支える震災伝承・防災学習の推進を支援し、語り部として市民が直に語り伝える「場」の調整・創出に注力することで、石巻市が震災の総合的な理解を深める場としての認知度向上につながっています。

南浜つなぐ館の運営も開始し、将来南浜で伝承活動に関わっていきたいという意向を持つ市民と共に、2020年に設置される南浜津波復興祈念公園において震災を伝える協働体制がスタートしました。

●まちづくり

住民主体のまちづくり組織「コンパクトシティいしのまき・街なか創生協議会」の事務局業務や、市街地再開発準備組合のサポートなど、中心市街地の復興と活性化を目指す地域の取り組みを支援しました。

地元で生業を持つ方々が時間的・体力的にも進め切れない部分を丁寧にまとめてゆくことで、地域の方から「何よりも必要で大切」と感じていただけるサポートを行うことができました。

7-2. 収益事業

1. ＩＴ事業（2014年11月～継続中）

法人設立当初はＴシャツ等のグッズ販売収益がありましたが、公益法人化に伴い、IT事業を収益事業として位置づけました。

「石巻津波伝承AR」アプリのノウハウを生かしたアプリの開発・普及や、マルチコプター(ドローン)を活用した空撮について行政・民間から委託を受けることができ、原則的には利益を出すことが出来ない公益目的事業に対し、ITを活用した収益を充てることで団体の経営基盤を安定化させました。

大崎市水害に対応する排水ポンプの空撮

7-3. 決算報告

以下の事業期間の決算報告書より、一般正味財産増減の部の経常収益および経常収支について、グラフで概要をご報告致します。

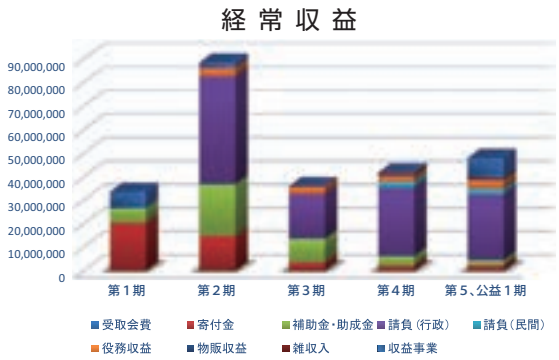
（※第5期の途中で公益法人化したため、決算報告書は分割して作成していますが、右のグラフでは、第5期および公益1期を1年分として合計して表示しています）

第　1　期　2011年 5月13日～2011年 9月30日
第　2　期　2011年10月 1日～2012年 9月30日
第　3　期　2012年10月 1日～2013年 9月30日
第　4　期　2013年10月 1日～2014年 9月30日
第　5　期　2014年10月 1日～2015年 6月30日
公益第1期　2015年 7月 1日～2015年 9月30日

1. 経常収益

第2期は緊急雇用創出事業の受託や助成金により大幅に収入が増加しましたが、第3期に落ち込み、以降は徐々に増加してきました。

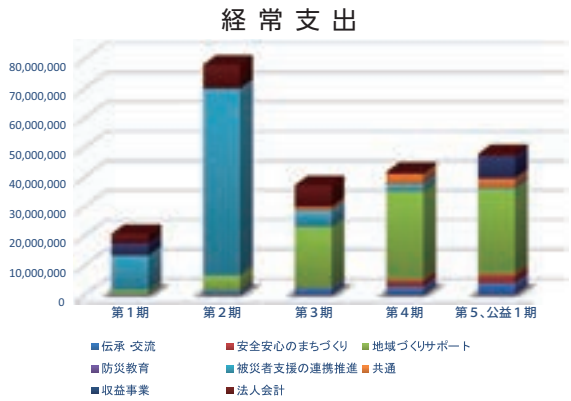
寄付金は急激に減少したものの、活動の原資として大切に確保しながら、民間からの請負や収益事業の獲得により財源を多様化させ、事業の安定化と有効化を図っています。



2. 経常支出

第1期、2期は緊急期の被災者支援が支出の大部分を占めていましたが、震災2年目の収益の落ち込みと共に、支出も減少しています。

第3期からは、復興応援隊業務の受託により、地域づくりサポートに移行しています。



〈事実関係の報告〉週刊誌の報道や百条委員会にまつわる経緯について

2012年 3月　石巻災害復興支援協議会が貸与を受けた車両の扱いに関し当会や元代表が社長を務める建設会社が違法行為を行ったかのような記事を週刊誌が掲載
2012年 4月　石巻市が「東日本大震災復興促進特別委員会」を開催し、委託契約の経緯等を確認。当会当初より積極的に資料提出に協力。
2012年 4月　当会の内部調査を進め、運営体制を強化するために外部からの理事や弁護士の監事が新任。元代表は理事辞任、当会を脱退。
2012年 5月　石巻市が「災害廃棄物書類業務委託等に関する調査特別委員会」(以下、百条委員会)を開始。
2012年 6月　百条委員会から提出要求のあった記録に加え自主的に資料を提出。要求の法的根拠や個人情報取扱い方針の説明があれば不提出書類の追加開示にも積極的に協力する旨回答したが、現在に至るまで法的根拠の説明なし。また、百条委員会からの出頭請求に基づき、委託契約執行時の専務理事・理事が証言。建設会社社長は法令に基づき宣誓拒否の上で証言はするとしたものの、百条委員会は尋問を中止。
2012年 7月　建設会社社長が、百条委員会による書類提出要求の法的根拠がないとして行政訴訟。2016年3月現在も訴訟中。
2012年 9月　百条委員会が建設会社社長を書類不提出で刑事告発。事実解明にいたらないまま調査終了。
2012年 9月　詐欺行為とは認定できず名誉棄損が行われていたとして当会を中傷するブログ該当箇所の仮削除を求める命令を仙台地裁石巻市部が発令。
2012年10月　当会コメントをWEBサイトで発表。透明性が明らかになることを期待して協力したものの、百条委員会に置いて事実の解明に至らなかった点について遺憾に思うと共に、百条委員会の報告書について事実と異なり誤解を引き起こしかねない点について説明する文書を当会から提出。
2014年 3月　石巻警察署が建設会社社長を被疑者とする詐欺被疑事件として当法人を捜索。当会からは強制捜索となったことについて遺憾表明。
2014年10月　当会理事が石巻警察署を訪問し、供述調書の記録に対応(2回)建設会社社長が逮捕。
石巻警察署が建設会社社長被疑者とする詐欺被疑事件として当法人を捜索(2回目)。強制捜索となったことについて前回同様遺憾を表明。
2014年12月　石巻警察署が当法人を訪問。任意提出および押収分の資料の一部について、原本を返却。建設会社社長の裁判について石巻警察署から説明。
・車両活用事業に関わる書類は、裁判に使用する可能性があるとのことで未返却。未返却書類の返却予定時期は、1年以上先になる。
・「公判前整理手続き」(検察と弁護側で事前に訴訟の争点を確認)をとるため、地方裁公判開始が半年後。判決が出ても上告があれば長期化。
・みらいサポート石巻／災害復興支援協議会は、事件に無関与と考えており、検察が供述調書を記録していなければ、裁判にも呼ばれないと思われる。

当団体は災害直後の多忙な中、目の前の復興支援活動に注力しながらも資金管理には特に気を使っており、会計報告も会計監査人の監査を経て適正に行われています。週刊誌の記事により起こった一連の騒動により、当団体の活動に資料をきたすことになりましたが、何よりも大きいのは、事実関係の確認もないままに騒ぎが大きくなり、お世話になった皆様からの信頼を大きく損ねる事態となったことです。その中で、私達は震災復興のために設立された団体であることを鑑み、石巻の明るい未来を創りだすべく努力をしていくことで、皆さまの信頼を取り戻していく所存です。

ただ、百条調査委員会報告書において、当会が災害対策本部に対して震災直後より尽力いただいたＮＰＯの方々の活動人数や報告を重ねてきた事実に対して「民間団体を安易に招き入れた」との表現がなされ、石巻市が毎月公表する復興情報において一時期NPOの活動人数が不記載となったことは、震災後1年間の16万人の方々による多大な貢献を鑑みると、その力がなければ立ち上がれなかった石巻の地元NPOとして心より遺憾に思います。

当団体は、2015年に公益法人の認定を受け、一層公益性を高めた活動を継続してまいります。本件に関連して関係者の皆様にお詫びすると共に、改めて心からの感謝を申し上げます。

8. 巻末資料

石巻市におけるボランティア・NPO の連携に関する資料

※本巻末資料は、今後の災害において NPO を位置づけいただくため、石巻市社会福祉協議会より資料提供のご協力を得て、作成しています。

石巻市社会福祉協議会（災害ボランティアセンター）が使用した様式

ボランティア受付用紙（個人ボランティア用）

ニーズ表

団体ボランティア連絡票（団体ボランティア用）

災害ボランティアセンター、石巻災害復興支援協議会で作成した様式

石巻専修大学テントサイト使用ルール

2011/05/07 改定

石巻専修大学テントサイト使用ルール

石巻市災害ボランティアセンター
石巻災害復興支援協議会

注：ここは、大学側のご好意で貸していただいている場所です。現在、ルールを破っている方がいるため、退去の警告を受け、ボランティアセンターの運営が危機的状況に追いやられています。もしボランティアセンターが閉鎖してしまったら、今後の活動は継続できなくなってしまいます。各個がルールを厳守していただき、生活くださるようお願い申し上げます。なお、ルールを守れない方は退場していただきます。あらかじめご了承ください。

1. テントサイトを使用されるボランティア（個人・団体）の方はボランティアセンター（５号館１階西端）へまずご登録ください。
2. 水道が使用できません。案内図の仮設トイレをご使用ください。ボランティア数の急激な増加により、仮設トイレ数が不足しています。仮設トイレはボランティア団体自身により清掃等を行っております。きれいに使用するよう、ご協力をお願いいたします。また、故障や詰まりがあれば使用を中止して、支援協議会までお知らせください。
3. 構内は灰皿のある指定場所のみでお願いいたします。
4. 原則として各自ゴミはお持ち帰りください。
5. 構内で発生する盗難事故やトラブルについて、石巻専修大学、石巻市ボランティアセンターおよび石巻市災害復興支援協議会では責任を負いかねます。貴重品はご自身で管理ください。
6. ２階・３階・４階（屋上）は、地震による天井等の落下の恐れがあるため立ち入り禁止となっております。

＜自動車関係に関する項目＞

1. 構内周回道路は一方通行です。キャンパス案内図を参照の上ルールを守って通行してください。なお、５月の大学講義の開始に伴い駐車場利用の制限がありえます。その際はボランティアセンターの指示に従ってください。
2. 車輌等は所定の駐車場に置くようお願いいたします（図を参照）。
   また、芝生への車輌の乗り入れは厳禁です。
3. 大学に出入する場合は、北門から入り、南門から出るようお願いいたします。
4. 必ず車両許可証を記入し、フロントガラスの見える位置に掲示してください。

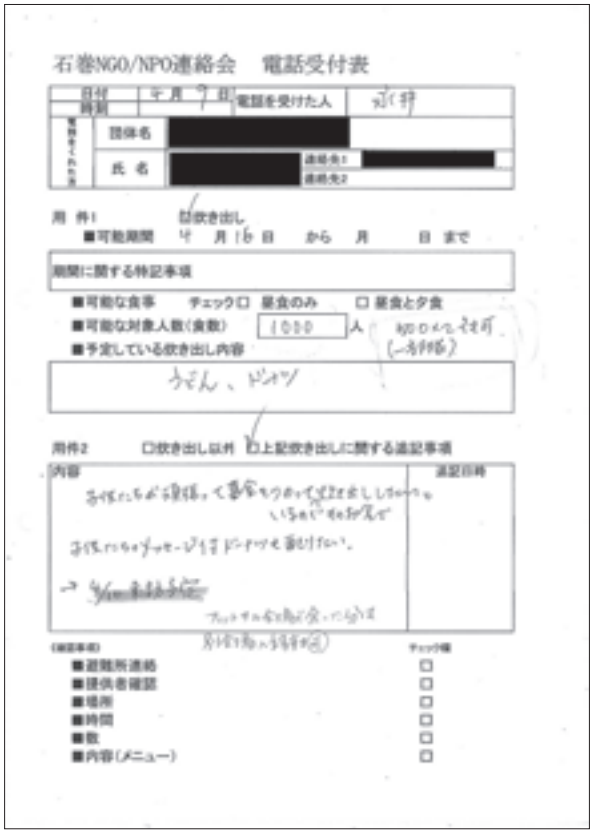
＜テントサイトに関する項目＞

1. キャンプサイトは多くの方がお休みになっています。他の方の迷惑になるため、夜 10：00 から翌午前 6：00 まではお静かにしてください。
2. 構内での飲酒は禁止です。
3. 構内の焚き火は禁止です。調理にはコンロを使用し、火の元には十分ご注意ください。
4. 設営テントには団体名（個人の方は『ボラセン』と記入）および氏名を記入したガムテープを貼って所属を明示してください。天候が不安定な時期で強風が吹くことがありますので、テントを設営される方は十分ご注意ください。また作業に出かける際は、全ての備品をテント内にしまって出かけてください。なお、ボランティア活動終了後に撤去される際には、必ず後片付けをお願いします。
5. テントは、所定の場所へ設置下さい（図を参照）。
6. 桜の木、ハードル等、大学内の設備にロープを張ったり、衣類等を干したりしないようお願いいたします。

共同スペースのため、皆様のご協力をお願いいたします。

石巻災害復興支援協議会で作成した様式

電話受付票（炊き出し調整用）



石巻NGO/NPO連絡会　電話受付表

日付	年 月 日	電話を受けた人	
時刻			
電話をかけた方	団体名	[redacted]	
	氏名	[redacted]	連絡先1 [redacted] 連絡先2

用件1　炊き出し

■可能期間　年 月 16 日　から　月　日まで

期間に関する特記事項

■可能な食事　チェック□ 昼食のみ　□ 昼食と夕食

■可能な対象人数（食数）　1000 人

■予定している炊き出し内容

うどん、ドンパツ

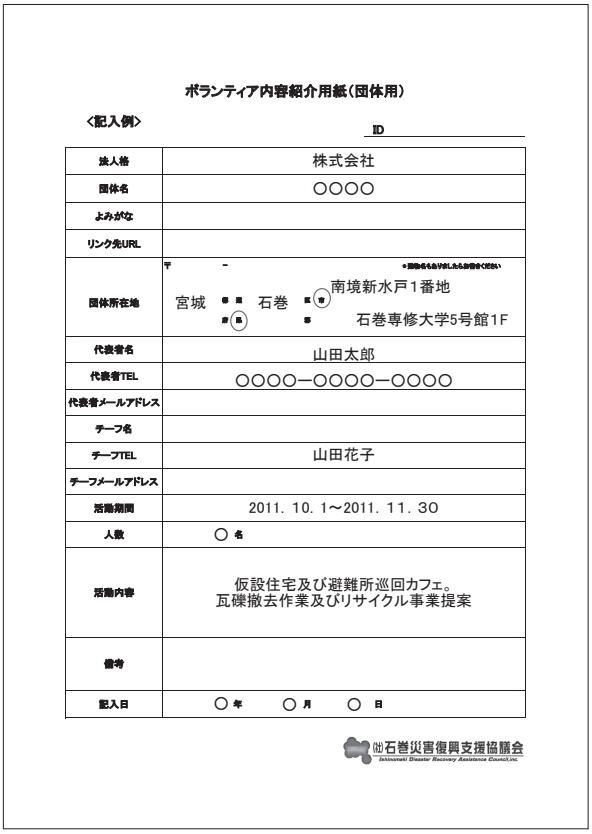
用件2　□炊き出し以外　□上記炊き出しに関する追記事項

内容	追記日時
[illegible]	

（確認事項）　チェック欄

■避難所連絡　□
■提供者確認　□
■場所　□
■時間　□
■数　□
■内容（メニュー）　□

ボランティア内容紹介用紙（NPO用）



ボランティア内容紹介用紙（団体用）

〈記入例〉　ID

法人格	株式会社
団体名	○○○○
よみがな	
リンク先URL	
団体所在地	〒　－　＊詳細がわかりましたらお書き下さい 宮城 都道府県 石巻 郡市区町村 南境新水戸1番地 番地 建物名 石巻専修大学5号館1F
代表者名	山田太郎
代表者TEL	○○○○－○○○○－○○○○
代表者メールアドレス	
チーフ名	
チーフTEL	山田花子
チーフメールアドレス	
活動期間	2011. 10. 1～2011. 11. 30
人数	○ 名
活動内容	仮設住宅及び避難所巡回カフェ。 瓦礫撤去作業及びリサイクル事業提案
備考	
記入日	○ 年　○ 月　○ 日

㈳石巻災害復興支援協議会
Ishinomaki Disaster Recovery Assistance Council, Inc.

石巻市内仮設住宅団地での活動に関するご案内

2012年12月17日
石巻震災ボランティア支援連絡会　事務局事

石巻市内 仮設住宅団地での活動に関するご案内

[illegible]

◇ 地域の現状 ◇

[illegible]

事例1）[illegible]

事例2）[illegible]

事例3）[illegible]

●集会所の使用に関しては、市役所や福祉人を通じた予約、関係者への口頭、使用時の連絡等を徹底し、団地ごとの管理にも配慮しています。

●集会所等に設置したテラス等の利用を通常でも周辺を持って開かく。住民の共通な物置共有スペースを気持ちよく活用できるよう、努力しています。

私たちは、支援が「与える側」と「受け取る側」に分かれてしまわないように、自然の主体性を尊重し、「人と人」の関係作りにより自然への歩みを自然しやすくなるような活動を目指しています。

問い合わせ：みらいサポート石巻　TEL.0225-96-3691　FAX 0225-96-3692
Email　gambappe@gmail.com

仮設支援連絡会　登録団体紹介シート

仮設支援連絡会　登録団体紹介シート

■ 団体名

（法人格：一般社団法人 ）

みらいサポート石巻

（ 代表者： 長谷 敏彦 ）

一般社団法人 みらいサポート石巻

[illegible]

■ 今年度の活動内容

[illegible]

■ 活動内容・活動地区　（事務スタッフ人数：　8 名、その他活動人数：　無し

[illegible]

■ 特記事項

（記入日：　2013 年　6 月 13 日）

石巻仮設サロン支援連絡会　議事要約

開催期間：平成23年8月～平成25年3月　(全59回)

開催回数	開催日/参加団体数	内　　容
第1回	平成23年8月10日 14団体	仮設建設の現状確認、石巻市仮設運営管理室の方針説明、石巻市社協より仮設住宅支援の枠組み説明、各団体より仮設支援の予定等を共有
第2回	平成23年8月19日 12団体	サロン活動の委託についての経緯や今後の予定の補足説明、石巻市社協による支援予定の説明、各団体による仮設住宅支援予定の確認を共有し、「つぶやき」の集約や報告方法について協議
第3回	平成23年8月26日 13団体	「つぶやき」シートによる情報共有について、社協との共有、見守り隊との連携を踏まえて、エリア毎の特徴などを共有
第4回	平成23年9月2日 16団体	石巻専修大学山崎ゼミによる「仮設住宅の実態調査」発表
第5回	平成23年9月9日 16団体	仮設住宅向け表札作りワークショップ、事例紹介(石巻復興支援ネットワーク)、見守り隊活動予定の説明(石巻市社協)
第6回	平成23年9月16日 17団体	事例紹介(オンザロード)、見守り隊・サポートセンター等の今後の予定共有(石巻市社協)
第7回	平成23年9月23日 11団体	事例紹介:「お茶っこくらぶ」(JIM-NET)、見守り隊・サポートセンター等の今後の予定共有(石巻市社協)
第8回	平成23年9月30日 13団体	事例発表(RQ市民災害救援センター)、見守り隊・サポートセンター等の今後の予定共有 (本日より見守り隊稼働)
第9回	平成23年10月7日 17団体	事例発表(め組JAPAN)、見守り隊・サポートセンター等の今後の予定(石巻市社協)
第10回	平成23年10月14日 15団体	事例発表(石巻ふるさと復興協議会)、寒さ対策についての情報提供
第11回	平成23年10月21日 16団体	事例発表(プロジェクト結)、見守り隊・サポートセンター等の今後の予定共有(石巻市社協)
第12回	平成23年10月28日 18団体	自治会について、石巻復興支援ネットワークより、阪神・淡路の調査結果を共有
第13回	平成23年11月4日 15団体	仮設住宅での物資配布について(宮城県に送付されたが現在未配布の支援物資19万箱があるとの背景を踏まえ、物資の配布について協議
第14回	平成23年11月11日 20団体	前回に引き続き物資配布について協議。「仮設住宅での物資配布は出来るだけ控える」と合意
第15回	平成23年11月18日 17団体	仮設支援における問題点について、各団体から共有
第16回	平成23年11月25日 16団地	冬道の安全運転のお願い(石巻警察署交通課)、各団体の年末年始の活動について共有
第17回	平成23年12月2日 20団体	「団地ごとの支援の偏り」について協議、参加団体の活動エリアでの支援状況や自治会設立の実状を共有
第18回	平成23年12月9日 23団体	社協との連携について、社協よりサロン事業の現状、サロン活動のビジョンなどの説明をうけ、支援団体が社協とどのような連携ができるのか協議
第19回	平成23年12月16日 23団体	「集会所・談話室の利用状況」について集計表をもとに情報共有。「仮設サロンの有料化」について協議、自立促進という目的から実費弁償という考えが必要という認識を共有
第20回	平成23年12月23日 15団体	第3回被災者支援連絡調整会議配布資料の説明。「仮設サロン告知の仕方」について協議、成功例や問題点等を共有
第21回	平成24年1月6日 13団体	各団体が共通のフォーマットで活動状況と実績を報告。各団体が活動内容を共有することにより、団体同士の理解と各団体の向上心を高め、仮設住民の自立支援について意思を再確認
第22回	平成23年1月13日 16団体	社協支援員とNPO団体が現場ベースでどのような関わり方ができるかを話し合い、社協に伝達
第23回	平成24年1月20日 20団体	社協から支援員の立場、事情の説明を受け、改めて現場ベースでの協力の仕方を考えて社協に伝達
第24回	平成24年1月27日 18団体	支援員との相互理解と協力を促進する為、NPO団体の活動予定をgoogleカレンダーで共有する事を決定
第25回	平成24年2月3日 15団体	googleカレンダーを活用して活動予定を共有した結果、各NPO団体の連携はもちろん支援員との連携も取れ、良い支援に繋がる効果が報告。出席者を5分科会に分けてそれぞれの活動における問題点を出し合い、解決策について話し合い
第26回	平成24年2月10日 24団体	前回実施した5分科会で協議された内容を共有し、全体で問題共有と解決法の確認
第27回	平成24年2月16日 19団体	仮設支援においての記録、次への参考とするべく「仮設カルテ」の作成を決定。記録を残す意味、効果、記入方法について協議
第28回	平成24年2月23日 21団体	仮設支援をボランティアから地元市民への移行(引継ぎ)・撤退について、時期・方法についての団体方針確認
第29回	平成24年3月1日 23団体	中越地震から災害復興支援を続ける経験者　(中越防災安全推進機構、平井氏、齋藤氏、石塚氏の3名)を招いて勉強会を開催。公演後にディスカッションも実施し、山古志村、小千谷市での仮設支援の経験話から多くの知見を共有
第30回	平成24年3月8日 20団体	他機関との関わりについて共有。活動時の緊急連絡先、連絡方法の確認

開催回数	開催日/参加団体数	内　　容
第31回	平成24年3月15日 18団体	「仮設カルテ」の作成(記入)について協議(「仮設カルテ」は仮設支援でも前例がなく、記入しながらルール作り。各団体が事前にカルテを確認し、活動に入っている。各団地の特徴、団地内のルールの記載などは参考になっている。)
第32回	平成24年3月22日 20団体	仮設カルテのルール、改善、実際に2週間記入してみての見直し実施。(書きやすく、見やすくする為に記入項目、フォーマットを改善)
第33回	平成24年3月29日 25団体	石巻市福祉総務課から依頼の在宅者向け支援物資配布について、在宅支援会議と合同で趣旨の説明を受け、対応可否を協議(配布活動を依頼されたが連絡会としては対応せず)
第34回	平成24年4月5日 12団体	4月以降の活動方針、予定について各団体に確認
第35回	平成24年4月12日 16団体	各団地の集会所の利用回数、内容を一覧にして支援活動の偏りを確認。是正の為、各団体で活動範囲、内容を踏まえた協働について検討
第36回	平成24年4月19日 20団体	支援員さんからのニーズについて、社協より資料「仮設住宅支援における対応Ｑ＆Ａ」「エリア日報特記事項まとめ(抜粋)」をもとに説明をうけ協議。次回4/26は「ざっくばらん会」開催
第37回	平成24年5月10日 11団体	団体の1月から3月までの報告書をもとに活動状況、活動実績を共有
第38回	平成24年5月17日 16団体	内閣官房内閣広報室が参加し「くらしの手引き夏号」の制作に先立ち、支援団体との意見交換
第39回	平成24年5月31日 13団体	現在の仮設団地における問題点の共有
第40回	平成24年6月14日 13団体	東松島復興協議会　代表木村氏より、東松島市の現状等(東松島のNPO・NGO・ボランティア団体の支援活動について)を共有。
第41回	平成24年6月28日 12団体	各仮設団地の自治会およびコミュニティ形成状況の確認
第42回	平成24年7月12日 16団体	自治連合会の会長、副会長、事務局長の出席を得て、今後の支援活動について協議
第43回	平成24年7月26日 13団体	夏のイベント・行事等の共有。ボランティアさんへ知っていてもらいたい「石巻川開き祭り」の話
第44回	平成24年8月9日 8団体	仮設サロン支援連絡会議開催から丸1年を経て、新しい取り組み等の共有
第45回	平成24年8月23日 13団体	健康増進の活動事例としてＮＰＯハーティの「フリフリグッパー体操」を紹介
第46回	平成24年9月6日 16団体	「自治連合会」へのサポートとして、仮設住宅での問題点の共有と対処方法を協議
第47回	平成24年9月27日 12団体	「今後想定される問題点」として、冬季を迎えて雪や凍結の対策や、孤独死や迷惑物資の対応を協議
第48回	平成24年10月11日 11団体	支援活動のガイドラインについて
第49回	平成24年10月25日 13団体	支援活動のガイドラインについて
第50回	平成24年11月8日 11団体	支援活動のガイドラインについて
第51回	平成24年11月22日 11団体	ふるさと復興協議会より「開成地区アンケート調査」の結果報告 支援活動のガイドラインについて
第52回	平成24年12月6日 10団体	更新に滞りが見られる「仮設カルテ」と「googleカレンダー」について協議。 支援活動のガイドラインについて →12月17日付にて「石巻市内　仮設住宅団地での活動に関するご案内」を公開
第53回	平成24年12月20日 13団体	「今年一年の総括」 来年の方向決めの参考にするため、1年活動した結果、住民はどう変わったか?現在の状況はどうなっているか？を共有
第54回	平成25年1月10日 14団体	震災から2年を経て現地の状況も変わる中、各団体の方向性を共有
第55回	平成25年1月24日 11団体	各団体の活動実績を振り返り「NPOだからこそできる事」を再確認。 今後、仮設サロン支援連絡会議をどうしていくか、連絡会議に出席するメリットや改善点の意見集約
第56回	平成25年2月7日 15団体	復興住宅概要説明会での配布資料を基に情報を共有。今後のフェーズ変化やNPOに合わせ、地域力を育てるプラットフォームの必要性について意見交換
第57回	平成25年2月21日 17団体	NPOが活用可能な政府の財政支援の紹介 次年度に取り組むべき事例(人材不足、震災障がい者への支援など)を共有 39レタープロジェクトについて紹介
第58回	平成25年3月7日 16団体	石巻社協の新体制(地域福祉コーディネーターの設置とプラットフォーム機能の設置)の説明後、新たな枠組みと関連して、NPOの連携によるインフォーマルな支援の進め方について意見交換 石巻災害復興支援協議会活動報告書の完成案内
第59回	平成25年3月28日 16団体	震災から3年目の支援の在り方について意見交換。支援過多が自立の妨げにつながる観点も踏まえ、各団体の自己評価の必要性を再確認。 次年度の連絡会の目的・在り方について意見を聞き、翌月は連絡会の在り方を見直すため、参加団体によるワークショップ形式の準備会開催を決定

※仮設支援全体の方針に関わる内容を網掛け表記

石巻仮設支援連絡会　議事概要

	開催日/参加団体数	内　　容
第1回	平成25年5月9日 11団体	・登録団体紹介シートの説明と記入依頼 **＜活動方針　Part Ⅰ＞**・各団体の25年度活動方針共有　・活動方針についてグループ討論 活動紹介シートによる参加団体の把握を開始。地元団体の協力を得ながら、無理なく引き継ぎしていく考えを共有
第2回	平成25年6月13日 18団体	**＜活動方針 Part Ⅱ＞** ・各団体の活動方針共有 各団体にプレゼンをしてもらい、そのキーワードを他団体からも一語で表現してもらうことで、各団体の方針を共有
第3回	平成25年7月11日 16団体	**＜活動方針 Part Ⅲ＞** ・活動方針のキーワードごとにグループ分けし、想定される疑問・課題・改善案を共有 前回キーワード「よりそい、つながり、地元主体、活性化」についてグループ討論し、課題や活動状況を相互理解
第4回	平成25年8月8日 20団体	**＜地域の担い手 Part Ⅰ＞** ・地域の担い手の現状について　市地域協働課・社協・NPOセンターから紹介 「民生委員の役割と現状について」「自治会、町内会、行政区長の仕組みと現状について」「地元NPOについて」 仮設以外に399行政区、121町内会があることや、民生委員の現状や改選時期、地元NPOの危機意識等を共有
第5回	平成25年9月12日 20団体	**＜地域の担い手 Part Ⅱ＞** ・地元の担い手との活動相関を見直すワークショップ 各団体と地域団体との関係性を見直す図を作り、解決策と留意点についてワークショップ。「新しい関係づくりのヒントになった」、「地元団体との協働に対しての重要性に気付いた」というグループもあり、連携強化や、新たな連携と協力の糸口を提供
第6回	平成25年10月24日 11団体	**＜地域の担い手 Part Ⅲ＞** ・地域の担い手との関係づくり 「住民支え合い活動助成」を受けている地元3団体から活動紹介 協力関係を構築する上で、地元の立場から配慮する点等について情報共有。 「一緒にできることを企画することが求められている」「地元団体に無理させないアプローチをすべき」「担い手にしようとするというより、ちょっとした変化を起こしていくべき」との発表
第7回	平成25年11月14日 16団体	**＜復興住宅 Part Ⅰ＞** ・前3回の振り返り ・石巻市社会福祉協議会から復興住宅の情報共有 ・「こんな復興住宅はイヤだ！！」を想像してみよう 復興住宅への移行を前に、想定される課題を自由な雰囲気で多様な観点から出し合うワークショップを実施。 ゴミ捨て場の問題や、雰囲気・治安の問題に対する意見が多く、既存の町内会との問題も取り上げられ、「災害時の助け合いがない」「医療機関との連携がない」「住んでいる人と顔を合わすチャンスがない」など様々な意見を共有
第8回	平成25年12月12日 17団体	**＜復興住宅 Part Ⅱ＞** ・集団移転団地、復興住宅事前登録状況について(石巻市地域協働課) ・「こんな復興住宅はイヤだ！」をくつがえそう 前回課題の対応策応を5つのグループで話し合い、「地域住民の方々に挨拶していくのが一番いい」「第三者が入ればクッションになれるのではないか」「自治会つくりの成功例を学ぶことも必要だ」「弱いままでいる人なんていない。ムードメーカーを市民の中から見つけ、育成し、そういう人たちも包み込んでいけるのではないか」という意見を、各団体の方針の参考として共有
第9回	平成26年1月16日 18団体	**＜復興住宅 Part Ⅲ＞** ・各団体から今年の抱負発表 ・「次年度の地域コミュニティ支援助成」について説明(石巻市地域協働課) ・質疑応答 ・仮設支援団体交流会について 復興住宅への動きが本格化していく中、NPOを通じた地域コミュニティ支援の助成制度案について市から説明
第10回	平成26年2月13日 28団体	支援団体交流会 仮設支援連絡会に参加団体と、社会福祉協議会の声掛けによる既存の団体を合わせて計28団体が参加
第11回	平成26年3月13日 14団体	・石巻市社会福祉協議会の平成26年度復興支援事業予定について ・グループワーク「石巻仮設支援連絡会の来年度の方向性と新名称について 連絡会の次年度の方向性を決めるため、開催頻度、内容、名称を5つのグループで話し合い。 地域全体が活動の対象となってゆくため、「仮設」の語を抜いて「いしのまき支援連絡会」と名称を変更し、来年度も月1回開催することを決定

（ワークショップ例）

「こんな復興住宅はイヤだ!!」を想像してみよう

「こんな復興住宅はイヤだ！」をくつがえそう

いしのまき支援連絡会　議事概要

	開催日/参加団体数	内　　容
第1回	平成26年4月10日 26団体	・地域包括ケアシステム勉強会 ・地域づくりコーディネート事業　について 石巻市地域包括ケア推進室から、地域包括ケアシステムの5つの構成要素や将来求められる機能等が説明
第2回	平成26年5月12日 18団体	・エリア主任・地域福祉コーディネーター(CSC)との情報交換会 ・連絡会のML及び登録団体紹介シートの更新について ・運営幹事会について 社協で地域生活支援員として活動している3つの地区(中央部、沿岸部、内陸部)のエリア主任・CSCと、支援団体との情報交換、運営幹事会について、改めて説明および参加呼びかけ
第3回	平成26年6月12日 21団体	・地域包括支援センターに関する勉強会 (北上地域包括支援センター) 地域包括支援センターの役割と現状を理解するため、北上地域包括支援センター職員を招いて勉強会を開催
第4回	平成26年7月10日 16団体	・ワークショップ「仮設の団地情報について活用方法を考える」 社協が仮設住宅団地ごとに作成中の「団地診断シート」を支援団体に共有。その活用法についてWSを実施 団地診断シートに追加できる情報等について話し合い、「世帯の年齢層比率」「世代、年齢層、独居世帯数」「仮設団地周辺の環境」など様々な提案
第5回	平成26年8月21日 18団体	・地域づくりコーディネート事業の趣旨説明(石巻市地域協働課) ・各交付決定団体からの事業説明(各交付決定団体) 交付決定団体であるBIGUP石巻、WE ARE ONE北上、石巻スポーツ振興サポートセンター、こはく、キャンナス東北、ピースボート災害ボランティアセンター、石巻仮設自治連合推進会から事業内容の共有、質疑
第6回	平成26年10月9日 17団体	・ワークショップ「市民へのアプローチの仕方を共有しましょう！」 住民へのアプローチを共有し、スキル向上につなげる事を目的としたWSを実施。発表では「笑顔であいさつ」「明るくする」「あえて出身地の方言をつかう」等の意見が出た。その後、WSの振り返りでは「距離感が大事だと思った」「自然とやっていることを文章にすることで、改めて理解できた」とのコメント
第7回	平成26年11月13日 16団体	・復興公営住宅の入居へ向けた取り組みについて(情報提供) 石巻市地域協働課より、復興公営住宅入居事前説明会のスケジュールや概要を共有。 内覧会に参加した団体から「今から復興住宅に入居する方々は周辺地域の人との関わり方イメージができていないと感じた」等との所感も発表され、支援のあり方を行政・社協・NPOが共に考えるきっかけに。
第8回	平成26年12月11日 18団体	・ワークショップ「住民の今の声を共有しましょう」 社協のCSCとエリア主任が同席し、WSを実施。「キーパーソンの見極めや育てる支援が必要」「地域が新しい方向に動くまでのサポートが大事」との意見
第9回	平成27年1月15日 14団体	・「地域づくりコーディネート事業の取り組み(進捗状況等)」発表(各交付決定団体) 交付決定団体より(進捗状況、方向性、気付きや感じたこと、成果)を絞って発表。交付団体を交えたフリートークでは「成果の見えにくいことをやるというのは、難しい」、「地域のキーマンは、自治会などの役付きの人には限らない」等の所感を共有
第10回	平成27年2月12日 43団体	・支援団体交流会 ・ワークショップ「身近な支え合い活動」 いしのまき支援連絡会参加団体と、市民活動団体にて「身近な支え合い活動」をテーマにWSを実施。参加団体同士間で活動内容や現状を把握することができた。
第11回	平成27年3月12日 16団体	・ワークショップ「次年度の連絡会について」 ・社協事務所移転について 次年度連絡会の内容開催頻度及び開催日、幹事会への参加、連絡会の付加価値に関して意見交換。発表では「行政、社協、NPO団体がフラットに話せる場がよい」「勉強会の開催を頻繁にしてほしい」「頻度は毎月が良い」というコメントがあり、次年度も毎月開催することを決定。
第12回	平成27年4月9日 16団体	・平成27年度の取り組みについて　・社協の事業紹介・各団体の事業紹介
第13回	平成27年5月14日 15団体	・介護保険制度について　・宮城県より「地域コミュニティ再生支援事業」の説明
第14回	平成27年6月11日 13団体	・仮設住宅からの移行支援及び復興公営住宅についてのワークショップ ①取り組みに関する概要説明；石巻市生活再建支援課、石巻市社協(復興公営住宅入居者支援事業、自立生活支援事業について) ②ワークショップ
第15回	平成27年7月9日 11団体	・「震災後の新しい住まいとコミュニティづくり～地域のみんなの取り組みと役割～」 講師:本間照雄　氏　(東北大学大学院社会学研究室、宮城県社会福祉協議会　復興支援福祉アドバイザー)
第16回	平成27年8月20日 12団体	①「石巻市の子ども支援の現状」について　【説明：NPO法人　TEDIC】 ②「子どもの権利」について　【説明：子どもの権利条約フォーラム大人実行員会】
第17回	平成27年9月10日 17団体	・各団体の現況及び今後の活動についての報告会 石巻市・・・復興政策部)地域協働課、地域振興課　　福祉部)福祉総務課、生活再建支援課 宮城県・・・環境生活部)共同参画社会推進課　　震災復興・企画部)地域復興支援課 復興庁・・・宮城復興局石巻支所
第18回	平成27年10月8日 11団体	・「平成27年9月関東・東北豪雨」被害おける大崎市災害ボランティアセンターへの支援について
第19回	平成27年11月12日 30団体	・支援団体交流会　「現在の活動の課題を一緒に考えてみませんか。」 参加対象　(1)いしのまき支援連絡会参加団体、(2)石巻市社会福祉協議会ボランティアセンター登録団体 (3)石巻市ボランティア連絡協議会加盟団体、(4)その他(石巻地域にてボランティア及び社会貢献活動されている団体・グループ等)
第20回	平成27年12月10日 13団体	・介護保険の改正点及び、ＮＰＯ等の役割について　　説明：石巻市健康部介護保険課
第21回	平成28年1月14日 12団体	・虐待防止センターの取組について　　講話：石巻市福祉部虐待防止センター
第22回	平成28年2月18日 46団体	・支援団体交流会　　講話：宮城県サポートセンター支援事務所　浜上章氏 参加対象　(1)いしのまき支援連絡会参加団体、(2)石巻市社会福祉協議会ボランティアセンター登録団体 (3)石巻市ボランティア連絡協議会加盟団体、(4)石巻市NPO連絡会議登録団体
第23回	平成28年3月17日 13団体	・次年度の活動方針について

いしのまき支援連絡会　登録団体

（2016年3月現在 順不同）

	法人格	団体名
1	任意団体 一般社団法人	石巻医療圏健康・生活復興協議会(RCI) 高齢者先進国モデル構想会議
2	任意団体	石巻仮設住宅自治連合推進会
3		石巻市立病院　開成仮診療所
4	ＮＰＯ法人	石巻スポーツ振興サポートセンター
5	ＮＰＯ法人	石巻復興支援ネットワーク
6	ＮＰＯ法人	移動支援Rera
7	一般社団法人	オープンジャパン
8	ＮＰＯ法人	お茶っこケア(よってがいん)
9	ＮＰＯ法人	オンザロード
10	宗教法人	カリタス石巻ベース
11	一般社団法人	キャンナス東北
12	ＮＰＯ法人	こども∞感ぱにー
13	学校法人	尚絅学院大学　総合人間科学研究所
14	宗教法人	真如苑　救援ボランティア　SeRV
15	ＮＰＯ法人	仙台グリーフケア研究会
16	任意団体	チームかながわSUN
17	任意団体	チームわたほい
18	ＮＰＯ法人	中国足心道療術師協会
19	公益社団法人	日本医療社会福祉協会
20	一般社団法人	日本カーシェアリング協会
21	任意団体	日本基督教団　東北教区被災者支援センター エマオ石巻
22	一般社団法人	ピースボート災害ボランティアセンター
23	任意団体	東日本大震災支援全国ネットワークJCN
24	ＮＰＯ法人	ヒューマンフェローシップ
25	一般社団法人	プロジェクト結コンソーシアム
26	ＮＰＯ法人	まちの寄り合い所・うめばたけ
27	ＮＰＯ法人	みやぎ連携復興センター
28	一般社団法人	みらいサポート石巻
29	ＮＰＯ法人	ライフリンク
30	一般社団法人	BIG UP石巻
31	ＮＰＯ法人	DoTankみやぎ地域政策研究行動会議
32	ＮＰＯ法人	JEN石巻事務所
33	ＮＰＯ法人	MAKE THE HEAVEN　め組JAPAN
34	ＮＰＯ法人	NPOハーティ
35	ＮＰＯ法人	TEDIC
36	ＮＰＯ法人	ソシオキュア アンド ケアサポート
37	任意団体	Pikari支援プロジェクト
38	一般社団法人	ワタママスマイル
39	任意団体	上釜を愛する会

石巻市 NPO 連絡会議　参加団体

（2016年3月現在 登録順）

	法人格	団体名
1	ＮＰＯ法人	いしのまきNPOセンター
2	ＮＰＯ法人	広域石巻住宅改善センター
3	任意団体	石巻を考える女性の会
4	任意団体	石巻市田代島獅子舞保存会
5	ＮＰＯ法人	手作りで元気を作る会
6	任意団体	石巻地区日本中国友好協会
7	ＮＰＯ法人	パソコンママネット
8	任意団体	おしゃべり倶楽部やすらぎ会
9	ＮＰＯ法人	石巻スポーツ振興サポートセンター
10	ＮＰＯ法人	いしのまき環境ネット
11	任意団体	骨髄バンクの会
12	任意団体	フットケアサークル　スマイルハート
13	ＮＰＯ法人	障碍児と共に歩む会
14	任意団体	石巻市ＰＴＡ協議会
15	ＮＰＯ法人	北上経営総合研究所
16	ＮＰＯ法人	石巻復興支援ネットワーク
17	任意団体	サポート石巻
18	任意団体	宮城県高齢者生活協同組合(ささえあい生協宮城)
19	一般社団法人	復興支援士業ネットワーク
20	公益社団法人	みらいサポート石巻
21	任意団体	おやこアロマケア　なでなで
22	任意団体	子どものための石巻市民会議
23	ＮＰＯ法人	特定非営利活動法人ジョイフル網地島
24	ＮＰＯ法人	ワーカーズコープ(石巻地域若者サポートステーション)
25	ＮＰＯ法人	Switch(石巻NOTE)
26	任意団体	心と体のケアサポート・Ｋコラボ
27	任意団体	放課後こどもくらぶBremen
28	ＮＰＯ法人	こども∞感ぱにー
29	一般社団法人	ISHINOMAKI 2.0
30	ＮＰＯ法人	にじいろクレヨン
31	一般社団法人	ピースボート災害ボランティアセンター
32	一般社団法人	りぷらす
33	ＮＰＯ法人	蜂の子
34	ＮＰＯ法人	ぱんぷきんふれあい会
35	任意団体	曽波神恵比寿太鼓保存会
36	ＮＰＯ法人	みやぎ子ども養育支援の会
37	ＮＰＯ法人	TEDIC
38	一般社団法人	キッズメディアステーション
39	一般社団法人	パワクロ
40	任意団体	石巻地域に共生型ケアをひろめる会
41	任意団体	石巻仮設住宅自治連合推進会
42	ＮＰＯ法人	かぎかっこPROJECT
43	ＮＰＯ法人	ライフサポートこもれび　ひだまりの家
44	ＮＰＯ法人	応援のしっぽ
45	ＮＰＯ法人	災害医療ＡＣＴ研究所
46	ＮＰＯ法人	乳幼児保育園ミルク
47	ＮＰＯ法人	太陽と風の夢楽園
48	ＮＰＯ法人	アリエッティの会
49	ＮＰＯ法人	石巻海さくら
50	一般社団法人	こはく
51	公益社団法人	sweet treat 311
52	一般社団法人	BIGUP石巻
53	一般社団法人	こころスマイルプロジェクト
54	任意団体	WE ARE ONE　北上
55	任意団体	カリタス石巻ベース
56	ＮＰＯ法人	ヒューマンフェローシップ
57	ＮＰＯ法人	JEN　(石巻事務所)
58	公益社団法人	日本医療社会福祉協会(災害支援チーム)
59	任意団体	石巻フィルムコミッション
60	任意団体	石巻観光ボランティア協会
61	ＮＰＯ法人	まちの寄り合い所うめばたけ
62	任意団体	がんばろう！石巻の会
63	任意団体	上釜を愛する会設立準備委員会
64	ＮＰＯ法人	お茶っこケア
65	ＮＰＯ法人	移動支援Rera
66	ＮＰＯ法人	Pleiades
67	ＮＰＯ法人	こころの森
68	一般社団法人	おしかリンク
69	ＮＰＯ法人	ベビースマイル石巻
70	社会福祉法人	石巻市社会福祉協議会

9. 代表あいさつ

代表あいさつ

未曾有の大震災から５年。

石巻には多くのNPOが駆けつけてくださり、被災者だけではなく支援団体に対しても多くのご支援をいただきました。東日本大震災から現在まで、惜しみない支援をしてくださった皆様に、改めて御礼申し上げます。

復旧工事の道半ばとは言え、復興公営住宅や防災集団移転地の整備、堤防、高盛土道路建設など、復興事業が具体的な形を表してきています。併せて、心の復興ともいうべきソフト面の対応も喫緊の課題であり、一人ひとりに応じた継続的な関わりが求められています。

この間私どもの団体も、石巻災害復興支援協議会から一般社団法人みらいサポート石巻、そして公益社団法人の認可という段階を踏みながら、震災直後の復旧活動にあたるNPO団体の調整から始まり、仮設住宅自治連合推進会を通じたコミュニティ支援、女川・東松島・石巻の周遊協議会が推進する教育旅行や石巻地方の語り部や被災地ガイドの連携、中心市街地のまちづくりや住民主導の地域防災力強化に向けた取組など、主体的に取り組む地元住民・団体のサポートへと拡大・変化してまいりました。

2020年には石巻市南浜津波復興祈念公園の整備が完了し、公園内には県内唯一の国立追悼施設も建設予定です。「市民が支える震災伝承・防災活動」を業務の柱とする当団体としましても、後継の世代に伝えつなぐことの重要性に鑑み、市民の皆さまのご協力を仰ぎながら、多様な震災学習プログラムを提供し、市内中央地区に「つなぐ館」、門脇・南浜地区に「南浜つなぐ館」を開設してまいりました。おかげさまで市内外から数多くの皆様にご来館いただき心より感謝申し上げます。

今後も被災地から何を伝え発信していくかに心を砕き記録を収集しながら、復興祈念公園の追悼施設開設時に何らかの貢献ができればと考えております。

市民目線を大切に、市民・関係機関の皆様のご指導を賜りながら、より公益性を高め、石巻の未来につなぐ活動に努めてまいりたいと存じます。

公益社団法人みらいサポート石巻
代表理事　大丸　英則

編集後記

「あの会議の雰囲気は、日本が変わるかもしれないと思いましたね」
震災から5年を過ぎた石巻で、ご支援をいただいていた企業の方が当時を振り返って語った言葉です。

震災直後の「全体会」・・・たくさんの関係者が一つのベクトルに向かって真剣に話し合い、大規模な連携活動を行う様子から、日本人の底力や、将来に向けた可能性を感じたのは私だけではなかったと思います。

震災から2年後、石巻におけるＮＰＯの方々からの善意による継続的な情報提供を基にＮＰＯの活動規模や成果を活動報告書としてまとめることが出来ました。その初版の部数が尽き、毎晩、石巻専修大学に集まっては現場に出ていった皆さんの熱意を記録として残すため、震災5年を機に、その後の変化を反省点も含めて少し追記して、お気持ちだけの価格をいただく形で出版させていただくこととしました。

将来起こりうる災害、特に、インフラの崩壊により物資支援や炊き出しが必須となるような大規模災害においては、組織的な連携が求められるため、出来るだけ多くの方々の善意や熱意を活かせるように、東日本大震災の支援において行動力と柔軟さを併せ持って活躍したＮＰＯの存在が、今後の防災対策に組み入れられれば望外の幸いです。

震災から５年が過ぎ、もともと人口減少傾向にあった被災地では「下り坂の中での復興」に取り組まざるを得ず「復興に向けて」という言葉の目指す先が、各々で異なってきているのが現状です。

この石巻市で「復興」を考える基盤となるものは、震災前に制定された、「まもりたいものがある」の力強い書き出しで始まる石巻市民憲章ではないでしょうか。大震災後を予見したかのようなその一語一語には、震災直後に石巻に集った人達と相通じる覚悟と決意が息づいています。

「感謝のこころ」を胸に、市外から来た支援者を、自分たちと共に地域を担ってゆく仲間として受け入れてくれる人達。私たちの団体もこのような方々の支えがなければ、存在しませんでした。

大きな災害に直面しながらも「感謝」を失わない石巻において、
「先人の知恵」として生命をまもる教訓がつたえつながれ、
大震災をきっかけとして外から来た人たちとのつながりを大切に、
共に未来をつくっていく・・・

今後、石巻がこのような「輝く未来」をつくれれば、それは、
「被災地の復興」を超えた、日本全体の未来に向けた普遍的な価値があるのではないでしょうか。

石巻市民憲章
（平成20年4月1日制定）

まもりたいものがある
　それは　生命(いのち)のいとなみ
　　豊かな自然

つたえたいものがある
　それは　先人の知恵
　　郷土の誇り

たいせつにしたいものがある
　それは　人の絆(きずな)
　　感謝のこころ

わたしたちは　石巻で生きてゆく
　共につくろう　輝く未来

石巻で活動した28万人を超える皆さん、それを受け入れた石巻の皆さん、
現地での活動を様々な形で支えて下さった皆さん、
東日本大震災で失われたものに対して思いを寄せて下さった皆さん。

全ての方々を紹介することはできませんが、スタッフを初め、皆さんのおかげでこの小冊子が形作られました。
石巻で活動して下さった全ての方々と、その活動を支えて下さった数え切れない人たちの思いに対して…
改めて、ありがとうございました！

みらいサポート石巻　中川　政治

ご寄付のお願い（一般寄付）

震災直後より温かいご支援をいただき、活動を続けることができました。
本冊子も、皆さまからのご寄付がなければ制作することができませんでした。
今後も、石巻の未来へつなぐ取り組みにご支援をお願いいたします。

振込みによる寄付

ゆうちょ銀行
02230-1-119977
社）みらいサポート石巻

七十七銀行　石巻支店
普通預金　9244883
社）みらいサポート石巻

クレジットカードによる寄付
みらいサポート石巻WEBサイトからご寄付下さい。

みらいサポート石巻　検索

税制上の優遇措置の適用対象となります。
税制優遇を受けるには、確定申告書に領収書が必要となりますので
Email　info@ishinomaki-support.com または
Tel　0225-98-3691 にご連絡下さい。

石巻南浜津波復興祈念公園予定地

石巻におけるＮＰＯの貢献
3.11～東日本大震災から５年～

発　行　日　2016年4月16日
発　行　所　公益社団法人みらいサポート石巻
〒986-0824　宮城県石巻市立町1丁目3番29号
TEL：0225-98-3691 / FAX：0225-98-3692
HP：http://ishinomaki-support.com
FB：http://www.facebook.com/ganbappe
E-mail：ganbappe@gmail.com
編集・制作　公益社団法人みらいサポート石巻
報告書作成チーム
協　　力　登録団体および協働団体の皆様
印　刷　所　株式会社鈴木印刷所

9784902745023

1920000002783

ISBN978-4-902745-02-3
C0000 ¥278E

定価（本体価格 278円＋税）
公益社団法人 みらいサポート石巻